

一回

家庭雜誌

十五日發行

七月十五日發行



石油瓦斯「ヒチリン」發賣廣告

農商務省專賣特許



直徑五寸五分高さ六寸量目四百目

定價　眞鍮製　一個　金三圓

本器は理學的の作用より石油を瓦斯に變化しつゝ使用する發明品にして經濟便利なることは既に需用諸君より好評を得たる者なり其効用の大略次の如し本器の燃料は石油を用うるも無煙無臭無害なり少しも座敷等を汚さす又危險の憂なく火力は非常に强烈にして一升の水も僅に四分間にて沸騰し鳥獸肉其他の物を煮焚するも炭火と替りなく石油費消高一時間に僅か二勺なり火加減と消すとは自由にして實に便益なる文明的の日用品なり故に御使用あらんことを希望仕候

内外國一手發賣元

東京新橋南金六町七番地（電話浪花二十九番）

宇都宮商店

●賣捌き御望の諸君は發賣元へ御照會ありたし●郵便爲換にて御注文の諸君は拂渡局東京新橋郵便支局●定價の外に荷造料と小包料御送付ありたし●御購求の節は前掲圖に御注意を乞ふ

各貨物は内外國の別なく信切迅速低廉に御取扱可申候間倍舊の御愛顧奉願上候

内外國貨物取扱

宇都宮回漕店

重過燐酸●濠洲産骨粉肥料輸入販賣所

東京新橋南金六町七番地（電話浪花二十九番）

宇都宮肥料商店

奇應丸

定價○瓶入五十錢○大包廿錢○中包十錢○小包五錢

●主治効能●

御小兒衆の虫のやまい○五かんきやうふう○胸いたみ○はら下り○しやくつかへ○船車のよい○酒の二日よい○はしか○ほうそ○產前產後はよろしからず

◎効驗の顯著にして而かも賣價の低廉なるは普く諸君の知らるゝ所願くは御試用の上倍々御高評を賜らん事を伏して奉願上候

東京市日本橋通一丁目(電話本局四百七十五番)

白木屋

大村彥太郎謹製

特約店

東京市神田區鍛冶町 大木合名會社
東京市上槇町中通 安川榮次郎
東京市銀座一丁目 佐々木玄兵衛
大阪市東區道修町 賣藥卸賣會社
其他全國の賣藥店に差出し有之候

㊕高等化粧品其他大販賣





●舶來上等香水石鹼は勿論匂袋うでわ正貝麝香人造麝香其他香具類薰香線香薄荷煙草兩用新案パイプ等一切

●右專ら精撰新案物大販賣仕候間多少共御用向願上候

●市内は電話又は葉書にて御一報有之候へば迅速見本持參の上御注文相受け可申候

●地方よりの御注文は大凡見積り代價及小包料添付し郵便爲替又は郵券代用にて御送金有之候へば相當品御送附可仕候

●弊舗は化粧品之外全國有効諸賣藥の販賣を爲す

直輸入元 化粧品卸問屋 東京兩國廣小路 **大木口哲**

同 東京神田鍛冶町二十二番地 大木合名會社

◦高等化粧料發賣廣告

（◦オイデルミン）（◦けしよう水）

壹箱三個入 金七十五錢

●「オイデルミン」は顔手足等あれ性の人なれば皮膚を滑澤美麗ならしむ●白粉下として使用すれば我邦在來の鉛製白粉の如き中毒を起すことなし●にきび、あせも、そばかす、顔のしみ等を除き又顔面頸圍等に脂肪多き人是を用ゆれば其脂肪を除き暑中是れを用ゆれば日に焦ける憂なし

（◦メラゼリン）（◦改良すき油）（柳絲香）

壹箱三個入 金壹圓五十錢

（◦コラキン）（◦改良びん附）（玉椿）

壹本 金十二錢

●柳絲香、玉椿を使用後久しきも髮の汚るゝことなく、又衣服の襟に垢附くことなし●本品は一種愛翫すべき清香を放ち併せて毛髮の光澤を益す本品は適度の粘力を有し在來の油の如く毛髮互に粘着することなし

（◦エリアンチン）（◦改良おしろい）（春の雪）

壹箱三個入 金貳圓十錢

●春の雪は衛生上有効無害にして年久しく使用せらる時は自然に皮膚を美麗ならしむるの妙効あり
●春の雪は使用後香氣の速に散逸し去ることなく永く芳芬を存して爽快を覺へしむ
●春の雪は在來の白粉の如く白粉やけを來すことなし

（◦ねりおしろい）（福原）

壹箱三個入 金七十五錢

●福原ねりおしろいは純白緻密にして肌膚に附き易く且つ佳快の芳香を放ち衛生上有益の佳品なり●本品は在來の白粉の如く剝落し又は斑痕をのこすことなく又衣服の襟を汚すことなし●本品は皮膚を滑澤ならしむるの効あるを以て永く使用するときは自然にはだを艶美ならしめ（にきびそばかす）顔のしみ小じは等を生ずることなし

（◦オイトリキシン）（◦改良水油）（花かつら）

壹箱三個入 金一圓二十錢

●花かつらは毛髮の營養を助其光澤益々艶麗となり髮に癖を生ぜず老年に至るも衰色を呈することなし

本誌は内外風俗上の歴史沿革を記述する者宇宙間の事物は細大遺す所なく文章の足らざる所は畫以て之を補足せり故に讀者は繙閲の間身其物に接し目其事を觀るの感あらん

THE SEJI GAHO

毎月七日 一回發行

世事畫報

（第壹號七月十三日發行）

發行の趣旨○祝文（島田三郎）○祝詞（徳富蘇峰）○祝詞（野口勝一）○祝言（白念坊如電）○祝文（勝浦鞆雄）○祝文（今泉定介）○挿畫説（赤松軒）○祝文（島本鳥歌）●記事○世事門○納涼（橋亭小史）○攝津地方の盆踊（杉の屋靑）○駿府二丁町精靈祭（靜城生）○風俗樂（川崎千虎）○京都の夏風姿（霞蝶園主人）○花賣（星升主人）○大阪花街の姉妹盃（豐川）○遊女（醉霞居士）○嘉祥（内藤耻叟）○鎌倉時代の風俗（覲風子）●飲食門○豆腐（多稼迂人）●服飾門○鬘の制（星橋主人）●言語門○三河豐橋町方言（好古生）○駿河城の腰方言（つゝれの舍）●聲曲門○本邦各地の子守歌（坪川溪礫）○羽前鶴岡瑩狩歌（庄内東方）○俗曲私考（竹柴金松）●遊戯門○人形芝居（星橋主人）●醫事門○狂犬病（小野寐覺）●器用門○扇の考（紅の家）○蒔繪の沿革（涙越皷麿）●殖產門○下總行德の鹽田（多稼迂人）●動植門○鶴の略説（久永章武）●時令門○七夕瑣言（方寸舍）○盂蘭盆（一栞庵）○梅雨考（坪川辰雄）●地理門○靜浦の海水浴（富田溪蓮）○信濃の避暑地（小野寐覺）○鷲嶺の大巖窟（井上頼文）●災異門○災害錄（坪川辰雄）●海外風俗○韓國の器具（書談子）●雜錄門○野試合（太田杏村）○武士奇談（耕納雨柳）○伊勢の浦苞（有隴國風）○見聞雜記●詞壇納涼（鶯亭金升撰）●挿畫

七夕（梶田半古）○納涼（小堀鞆音）○鎌倉時代の風俗（小堀鞆音）○海水浴（淺井忠）○花賣（尾形月耕）○行德の鹽田（富田秋香）○野試合（尾竹竹坡）○金澤の奇士（尾竹國觀）○韓國の器具（尾竹國觀）○其他鬘、人形芝居、及ひ意匠圖

●定價

本誌は毎月七日發行○定價一部金拾五錢○六部前金八十七錢○十二部前金一圓六十七錢○二十四部前金三圓十二錢○郵稅一部金一錢●代金拂込は神田今川橋郵便受取所宛○郵劵代用一割增○東京市内は郵稅不要

發行所 東京下谷區中根岸七十二番地 温古堂 中川九郎

發賣元 日本橋區本石町三丁目廿三番地 金昌堂 杉山書房

●大賣捌所 神田區表神保町 東京堂　京橋區尾張町二丁目 東海堂　京橋區鎗屋町 北隆館

挿畫鮮麗記事明確風俗探究の一大良誌なり

國民之友夏期大附錄

八月十日發行第三百七十二號に添ゆ

尾崎紅葉、川上眉山、國木田獨歩、島村抱月、德富蘆花、後藤宙外諸氏の冷雋清冽なる短編を以て讀者諸君高嶺の翠嵐に醒め曲浦の軟沙を蹈む時の清翫に供すべし

新刊發行 **木村重成** 附大坂落城史　定價十五錢　郵稅四錢

國民叢書第十一冊　新刊再版 **單刀直入錄**　定價十二錢　郵稅二錢

正岡子規閱　下村爲山畫　新刊初版 **新俳句**　定價三十五錢　郵稅六錢

森田思軒重譯 **ユーゴー小品**　定價三十五錢　郵稅六錢

德富健次郎著 **青山白雲**　定價廿五錢　郵稅四錢

既刊八冊 **國民小說**　定價各十五錢　郵稅各四錢
第五冊ニ限リ定價二十錢第二冊ニ限リ郵稅六錢

發行所　東京日吉町　民友社

國民叢書第十二冊

寸鐵集

近刊　定價金十三錢　郵稅金二錢

發行所　東京日吉町　民友社

速記法　自宅獨習生募集　二ケ月卒業

○規前入用者は郵券二錢を投ずべし

東京下谷區徒士町二丁目三十番地

速記學專修所

家庭雜誌

定價表

	(前金)	(市外郵稅共)
一冊	拾錢	拾一錢
六冊	五拾七錢	六拾三錢
十二冊	壹圓八錢	壹圓二拾錢

廣告料　一行（五號活字廿四字詰）一行八錢

家庭雜誌　每月一回十五日發兌

本社電話番號本局七十番

發行兼印刷人　吉崎圓吉　編輯人　金子佐平

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

明治三十一年七月十五日發行
家庭雜誌第百拾八號

目録



小川一眞製

京都嵐山

家庭雜誌第百十八號

（明治三十一年七月十五日發兌）

社説

婦人の德

（本篇は蘇峯生が一番町教會婦人會に於てなしたる講話筆記なり錄して社説に代ふ）

日本も女子敎育といふ事が大變流行して近來では女子才藝の上から見ると多少の進歩を來たしました。先づ手近い例が女で四十才以上の者ですと隨分讀み書きの出來ない者もある、所謂る目に一丁字なき者も尠くないが、もう二十才前後の婦人ですと自分の姓名の書けない者は殆ど見當らないと言つても宜しい。彼の普通敎育は全國に隨分行き渡つて其の効果著しい中にも其利益を受けたものは別して女子であります。又た普通敎育ばかりでなく中等敎育の上から見るも不完全ながら女子は餘程その恩澤を被て居て、植物學とか動物學とか、馬の骨やら牛の頭やらをひねくつて、仲々大した者です、更らに進んで女子大學校の設立さへ企てられて居るといふ次第で、此勢でゆくと紫式部清少納言の類も必ど現はれることゝ思はれて賴母しい事で御座います。

そこで私がこれから申上げ度いと思ふのは、以上才藝の上ではなく、婦人の德、乃ち女子德育の上であります、又た婦人の德と申した處がなか〳〵一通りでない、一々擧げて來れば高遠なる宗敎上の敎養にまでも及びますが、私のは極く手近な處で、要之、婦人の持前の德といふ丈けの事で御座います。成程宣敎師の學校などで頻りにやつて居ます處は立派には相違ないが其弊は神を知つて人を忘れ、理に深ふして實に淺きの憂があると思はれます、そこで私のは此種の高遠なものではなく、婦人に無くてならぬ者、恰度衣服のやう

なもの、それが錦であらうが木綿であらうが其處は自分々々の御勝手として、兎にも角にも衣服を着て居る丈けは居なければならぬやふに、これ丈けの者は是非婦人が持てゐないと困る、居なければならぬといふ德を申上げたいので御座います。

第一が謙遜。これは是非婦人に無くてならぬ者の一で、私の朋友に其女兒を下子と名づけた人があります、これは下等といふ意味では御座いません、さうで無い、下は謙の意を示したもので、可笑なやうだが考へた名であります。要之女は謙遜といふ心持が大切なので、無論男子は謙遜でなくても宜いといふ道理はないが別して婦人を尤も美はしくするは謙遜で御座います。しかし誤解されては困ります、外形をいふのではない、後の人は腰が低い、それが必しも謙遜ではない、人が九十度に腰を屈めるのを更に六十度に屈めた處が、それで一倍謙遜だとは申されない、頭ばかりピヨコ／＼と屈めて心の內で「何だ貴樣が」と對手を馬鹿にするなら何にもならない。又た其かと言つて、頻りと自分を馬鹿にする何でも人はエラくつて自分は愚物、自分程間抜はないと無暗に自分を自分で攻擊する、それが謙遜ではない、さうではない、謙遜の眞の心持といふのはソクラテスの申した通り、自己を知る、乃ち自分丈の價値は自分で知て居て、同時に他人の美を認め、それに感服し、效めて之に倣はんことを希ふので、所謂ゆる賢を見ては等しからんことを望む、則ち謙遜の極意であります。白粉や紅花やで人形のやうに裝るよりも謙遜だけの婦人の眞の美は澤山です、手近かな例が、野の百合花を見よです、頭を垂れゐて却て其艶麗を増してゐるのは宜い證據でしよう。

第二が「プリクシー」。これは英語で、強て漢字に譯せば婉約とでも申しましようか、言ひ難ふ御座いますが要之、優くつて、約かで、それで行渡つて居る心持を

申すので御座います、此一事は別して婦人の特色とも申すべく、しかも今の年若い婦人方には別して欠げてゐるやうに思はれます、世間まゝ横文字を讀む野蠻人が婦人のうちに居るのを見聞致しますが、斯いふ婦人は何となくガサ〳〵して落付て居ない、それは起居動作ばかりでなく、心が狼狽てゐて、何だか火事場にでも行つてゐるやうで、フワ〳〵して輕氣球に乘てゐるやうな鹽梅で、從容な所、穩かな所が無い。それと申して私は小笠原流で何事もやつてもらひ度いと云ふわけではありません、誤解されては困る、物を運ぶに目八分とか辭儀をするに三指とか、恰度下手の芝居を見る物やうな、そんな事は識者の眼より見れば寧ろ滑稽です、さうではない、要之、彼の有名な和歌『淺香山影さへ見ゆる山の井の淺き心にわがあらなくに』とか又た『風ふけば沖津白浪たつた山、半夜にや君がひとり越ゆらむ』とか、この心持です、乃ち天眞の情念自然に流露して、花を見れば花に感じ、善を見れば善に感じ、恰度かの鹿の溪水を慕ふて谷間を下るが如く、心自から動いて物の善美に誘はれる、この心持です。世には隨分學問もあり才藝もありながら、其心はカラ〳〵と枯乾て、恰度三年も干して有つた麪包のやうで、齒も立たない始末に行かないのがある、それでは眞に困るのです。

私が亞米利加に參りました時、色々と彼地の若い婦人を見たり、又た女學校などに行つて見ましたが、なか〳〵活潑なもので、頭にかぶる帽子から衣服まで男に近い程の風で、端舟を漕ぐ球を投げる、如何見ても男のやうでありました。しかし女が男の眞似をするのは男が女の眞似をするのと同じて、私共は決して感心が出來ない。頻りに亞米利加を攻撃するやうだが私が亞米利加に行て見て其欠點を下の三個の物眞似にあると評した、第一は人間が器械の眞似をすること、第二は

白人が黑人の眞似をすること、第三は女が男の眞似をすること、乃ち私は此第三の眞似に就て又た我國の婦人に注意したいのです、それは亞米利加の宣教師が日本に來て隨分盛に女子教育をやつて居ますが、どうも其本國の弊が日本女子の上にも傳染してゐるやうに思はれる、前に申した横文字を讀む野蠻人が出來たやうに思はれる、兎角がサ〳〵して「デリケシー」といふ處がちつとも無い處の。それも亞米利加の本國ですと殊に新英洲あたりですと、清敎徒の血尙ほ其清新を保つて、社會には制裁あり、家庭には規律あり、未だ容易に斯る弊に沈んで女德を無にするやうなことも有りませんが、日本ではさう行かない、此點は能く注意しなければならないと思ひます。

先づ第二は此位にして置て、更に一歩を進め、第三は「センシブルチス」。これは思ひやりといふのが先づ適當な譯字で、自己中心主義の正反對を指すのです。世には萬事を自分の損得から割出して、他人の事など少も頓着しない、他人が如何あらうが自分さへ都合がよければ宜しいといふ輩が有りますが、こんな人と同伴に旅行でもすると大變です、連の者の迷惑なぞ少も頓着しない、自分の泊りたい時に泊り自分の食いたい時に食ふ、始末にいけない又たこんな女を女房に持た男は、それこそ生き乍らの地獄です、女房が勝手放題にやつて退けて亭主は小さくなつてゐなければならぬ次第。しかし其處が思ひやりで、自分のことよりも先づ他人の身の上に情を注ぐ、寒くはないか、暑くはないか、困りはしないか、色々と心を用ゆる、それはたしなみが大切で、例へば私共が或人を訪問すると其家の奧様が出で來て、時に御馳走も出る下にも置ないといふ風ですが、門で待て居る車夫には一向御頓着がない、たしなみとは此處です、寒い時には竈の下のたき落でも宜いから車夫に出してやる、暑い時には、水

一杯で宜いから飲ましてやる、それが思ひやりです。一杯の澁茶、たゞ消炭の火、そこに婦人の同情が十分に現はれてゐるのです。しかし斯く言へばとて、氣轉がきくとか能く氣がつくとか、それとは違います、氣轉だけなら眞逆の時は直ぐ自己中心を出して來る、さうではない、要之、同情のかたまりで、物に觸れ機に應じて、作爲を用ゐず、他人の身の上に情が移り思が働く、されば自から親切で注意が届く。

さて以上の三個、この徳が家庭に觸れ社會に觸れて來るもの、乃ち平和です、乃ち婦人の天職は平和です、言ひ換ゆれば以上三個の徳を備えて始めて婦人は平和其者といつて宜ろしい。自分が平和であるから、家庭の平和、社會の平和、自から婦人の徳に由て建てらるゝのです。世は文明開化といふと雖も、其實今も尚ほ動物的作用と人間的作用(又た神的作用)の二個の者の戰爭である、强の肉は弱の食、貧乏者は金持にいぢめられ、老人は壯いものにへこまされ、弱い支那は强い露西亞や獨乙に分割される、國と國とは未だ動物の域を脫しない。又た新橋停車場へでも行て見ると、女や老人や子供は押のけられて切符を買うことが出來ない、鐵道馬車にでも乘ると若い男が大意張で二人前の席を横領して老人は立て天井の皮にぶら下つてゐる、世界到る處に動物的作用が横流してゐる。婦人は即ち此間に立て能く其調和をはかり平和を來たらすのが其天職であります。弱能く剛を制す、鷄卵を重ねて置けば相觸れて碎れるが糠の中に鷄卵を置けば碎れない、婦人を弱いといふのが語弊ありとすればやはらかいといひましよう、其婦人が世の中のごつ／＼した連中のぶつかり合ふ間に立て其衝突爭鬪を防ぐ平和の原素となるのです。貧者と富者、强者と弱者、老人と少壯、更らに進んでは國と國、實に婦人より出づる平和の情に由て調和一致すると言つて差つかへないのです。

エドモンド、バルクが申しました、戸の外は寒飈猛り狂ふて凄い有様でも一度び家の内に入れば其處には春風吹く平和の天地が有ると、さて其家内の主人、平和の天地の中心は夫人ではないですか。又たグラッドストンが自分の書齋を平和の宮と名づけてゐました、其平和の宮の本尊は、則ちグラッドストン夫人ではないですか。近頃は東洋の平和を擔保するとか、世界の平和を擔保するとか、平和の擔保が大流行ですが、しかし其擔保は常も軍艦とか兵隊とか、腕力ざたの擔保です。要之、變則です、女にも巴御前のやうな剛力が有る、しかし正則でない。やはり平和の擔保の正則は平和の本尊、弱い婦人が元でなければならないのです。」そこで前申した謙遜、婉約、思ひやり、が備はつて始めて婦人の天職が全くせられるので、其反對で、高慢でがさ〳〵して自己中心なら婦人亦た平和の擾亂者、風波の源、衝突の相手となるのです。

私が西洋から歸る時、滊船の中でオーパー、シュライエルの書た「白ばら」といふ小説を讀みました、此小説の大意を語つて私の談話を結ぶことに致します。

亞非利加といふ處は御存知の通り彼な熱い處だから薔薇が極く少ない、處が西洋人どもが住んでゐる或處で、舞踏會が有つた。一人の婦人が白い薔薇を胸に挿してこれに臨んで見ますと、多くの婦人のうちで、一人年若い美くしい品のある立派な婦人がゐて、それが薔薇を挿してゐない。白い薔薇の婦人はこれを見て、あの女にこの薔薇を挿さしたい、これを挿したら別段に見上げるたらうと、こう思ふて自分の薔薇を其女に與りました。そうすると其女は其後その白ばらを何時までか手箱のうちに保存して置て、後年に至るまで其芳香が殘つてゐたといふ、話の筋はこれ丈けです。しかしこれより詳細言ふに及ばない、又た其深い意を彼是と解剖するにも及はない。私が今日申し上げた婦人の德、それが此物語のうちに悉く含まれてゐるのです。

（完）

史談

大阪御殿（上）

松露生

備前池田家の奥醫師にて田中意徳が祖母は名を菊と言ひ淺井長政が臣山口茂右衛門が娘なり、主家に因みて淀君に仕へ元和元年五月七日大阪城沒落の日まで長局に在りて仔細に落城の光景を見、併せて淀君の最後をも見屆けたるよし本人が實歴譚なり、元より眼に文字のなき女子の語るところ委しくはあらねど其の身の大奥に仕へたりしだけ多少還裡の景狀消息を知るの便宜たるべし、

落城の前二十日餘り、大石火矢一つ城の天守に中り棟瓦四つ打破り微塵に碎けて地に落ち候、奥向にて此の事を聞き傳へ何れも顏色青ざめ、早々御和睦ありて此の城を無事に殘したしなど語りあいける程に玉造口を堅めたる大將より一戰の後ち手負多く怪我人引取の人數を繰り出し城内の堅めも手薄になりたるなど注進に及ばれけるが、其後又も鐵砲一つ飛び來りお秋といふはした女一人頸筋を射貫かれ、大廊下の中程に僵れ伏したるを見て女房等は皆々氣を落し容易に表へ出づるものも無くなり候。侍共は珍らしき事とて其玉を秤りに掛け試みたるに量目三十匁ばかりあり候、其の玉は疊の縁二尺程カスリ、御臺子の所に至りて留りけるが、それより奥向は一面に幕を張りて丸の來るを避け申候。

軍さの評定は毎度にて上樣（淀君）も毎日化粧遊ばし評定の場所へ御出向きに成れば妾共御伴なして色々開き候事共有之候、御臺所にては毎日强飯を蒸し、餅を搗き候例しにて其餅、飯を皆々の長局へ配り候が、是れが例となりて毎朝一重ねづゝ局の前に置いて行き候

に後ちには珍らしからぬもの故大抵取り置くものなく、毎日積りていつも二三十づゝの餅長局の傍に立かけ石積たるやうに相成申候、扨て長局は五六十も有之候、女中は大抵大坂にても歴々の大町人の娘に有之候、京都より出候公家方にて茶道の指南務められ候向も有之候、局の中にても大藏殿（長束の妹）は別して權式高く重立たる女中六人ばかり有之、天樹院樣（秀賴の簾中）に仕へ候女中十二人妾し事御鬢削を見奉候へしが、院の御方碁盤の上に御立被成候しを秀賴公御手づから脇差もて御髮を少し御切り初め被成候が院と上樣と御姑嫁の御交情兎角むつまじからず、上樣は關東の御處置を兎角に御不本意と思召さるゝものから萬事上樣次第に遊ばさるゝ秀賴公には關東を生涯敵に思召され候ものから天樹院樣は躰のよき押籠人のやうなど申觸らし候へども眞實御夫婦の交情は左程にもあらじと存ぜられ候秀賴公には御側女と申者別段定まり候はねど御手附の女中二三人は有之候。

扨て毎日の御膳はお末より差し出し御手長の者受取り其處にて一寸毒味をいたし直ぐに御側衆に渡し御側衆にて又毒味をなし御手長の者へ渡し上るの例にて候へしも世間にて申處とは違ひ格別な盛膳にても無之候、落城の日妾し事長局に居り申候其節なか／＼まだ沒落などおもひも寄ずとて皆大氣に構へ別段取急ぐ模樣も無之候、朝八つ時ならん豫て貯へ置ける蕎麥の粉の有けるを取出し下女を呼び是れを蕎麥燒にして來れよと申しつけ候によりて下女はかしこまりて其儘御臺所へ參り候に間もなく周章たる顏付にて歸り來り先程より玉造口の方にて火の手上り、櫓燒落ち候と申候に依り、此の儘にても在り難しと、斥候を出し候に跡にて所々より火の手熾んに燃り表方の騷動はげしく噪ぎ立つ風情故、妾共も疊敷の御椽側まで出でゝ四方を見渡し候に見放しになりて何方も能見へ渡り候、火の手はなか

なか凄まじき勢にて所々の櫓掛を燒立て候故、速かに立退く用意をもなすべきかと局へ立ち歸り帷子を取り出し、三枚襲ねて下帶を堅く締め秀賴公より拜領の鎧を懷中して御臺所へ出で候へば、長局より出て來り候女中段々玆にて打ち合ひ、何れも、立退きの覺悟を極め襟ひきしぼりてかい〴〵敷く出立ちたるもあり、誰れやらん見知らぬ侍二三人黒き具足を着て此の所にありしが、女中共俄かの事とて何れもしどけなき躰にて顏の打傷を見て玉はれ上帶のゆるみて歩き難ければこれ締めて玉はれよとて涙ぐみて言ふもあれば高く罵り叫ぶもありける。

ジョージ、ミューラー　（三）

櫻川生

英國ブリストルはミューラーが一生の大事業たる孤兒院の在る所、ミューラーの愛子數千人の住む所、ミューラーが九十三年の生涯を終へて靜かに永く眠る所なれど彼は英國人には非らずして普魯西の一收稅吏の子一千八百五年九月廿七日普魯西サキソニーのハルベルスタットに近きクロップペンスタッドに生る、將來の大慈善家たるミューラーは溫良柔和の幼年には非らずして噓吐きの手癖悪しき小兒にして殆んど生來の盜兒の如く窗に果園に沓を入れ厨に口を拭ふ小供心の悪戯には非らずして父が集め來りたる官金を盜むとも再三ならず『未だ十歲ならざるに余は父が保管せる官金を盜み出せしと屢々にして父はこれを辨償したりき』とは彼自ら語る所之が爲め父に折檻せられしも少しも改むる所なかりき若し少年時代の彼の行爲を以て將來を卜すれば如何にしても孤兒院の設立者にはあらで往くべき所は監獄なりしなり、彼十四歲の時其母歿せしが母歿するの日彼は日曜日の午前二時に至る迄骨牌を弄び母死して一家傷愁の淚に暮るゝ日曜日彼は酒店にお

りて酒を喫むり醉歩蹣跚として市中を飛び歩けり、此の如きの不孝者此の如きの放蕩兒は遂に十六歳にして醉酒放蕩の極遂に獄に繫がれ三週日間鐵窓の下に苦吟せしが少しも後悔慚愧の色なく虛言、詐欺、醉酒放蕩至らざるなく暴飲暴食の結果病の床に臥すと百日間なりしも病癒えては亦放蕩をこれ事とし二十歳にして再び病床に苦しみしも快癒の後は父の名を騙り其書籍を典物となし學友數輩と手を携へて瑞西に旅行せり而して彼は一行の會計方なりしを以て朋輩の金を誤魔化せしとも尠なからざりき是れ彼が一千八百二十五年に於てはハルレ大學に神學を修めをりし當時の狀況なり彼は神學生なりしも聖書をも有せず、祈禱をも爲さず、說敎をも耳にせざりき此年十一月病に罹りて後のとなりしが土曜日の夜の祈禱會に列して說敎を讀み、祈禱を聽き『予は其何故たるやを知らされど甚だ樂しく感じたりき』とかくて家に歸りしが彼が犯せる過去の罪惡に付いては左程に心を苦しめざりき自ら曰はく『當夜こそ余が生涯の廻轉機なりき』と

爾後彼の行爲は全く一變し骨牌を弄せず、淫猥の書を目にせず、聖書を讀み、祈禱をなし、敎會に赴き、眞面目に傳道の爲め一身を献げんものと決心せり、乍去彼の情婦の父母は彼の傳道に從ふを許さず志亦た屈して祈禱を廢せしと六週間なりしも一日傳道者の献身の事蹟を聞いて感奮し遂に其愛婦を棄てゝ素志を貫かんと決しぬ乍去實際彼が傳道師たることに就ひては遲疑逡巡し富籤を買ふて其將來を卜せんと試みんとしたるとすらありき、かくて彼は遂に決心を固めて傳道に從事し人々に道を說き一千八百卅二年遂にブリストルに來れり、彼の事業の種子は此處に蒔かれ、此處に生長し、此處に果を結べり。

（四）

ミューラーーブリストルに來りてより病者を見舞ひ、貧

民を助け、孤兒を憐れみ大に慈善的の事業に從ひしか遂に一千八百卅四年彼は內外聖書會なるものを設立せり其目的とする所は學校を設け、日曜學校を興こし、聖書を頒布し、傳道事業を助け、宗敎的書册を配布することにして孤兒院の事業も實に此會の一部分に屬するなり、而して彼か此の會の事業として成就せし所を見るに六十三年間に於ては各所に於いて敎育せし生徒數は十二萬一千六百八十三人、世界各國の語を以て聖書を印刷して頒布せしと聖書二十八萬一千六百二十五册、新約聖書百四十四萬八千六百六十二册其他の雜書數十萬册を下らず宗敎文學に關するもの其數實に一億一千一百萬餘册にして是が爲めに費せし所四百萬圓許なりとす

孤兒院の事業に就いていはんに千八百卅四年ミユーラーが內外聖書會を設立せしときに當り英國にては一孤兒院すらもなかりき而して千八百三十四年六月より一千八百九十七年五月廿六日に至る迄彼が養ひし孤兒の數は九千八百四十四人之が爲めに費せし金額は九十六萬四千七百六十四磅（一磅は我國の九圓七十六錢三厘）

ミユーラーが孤兒の爲めに注ぎし淚は遂に世界第一の孤兒院の設立となりぬ、後一千八百九十一年記して曰はく『余が孤兒の爲めに盡さんと特に思ひ起せし時は全英國の孤兒院に於いて養ひうる彼三千六百の孤兒にして英國の獄舍には八歲以下の孤兒其數六千人なりき余は是を見て益斯業に盡さんと決し遂に百二十名の院役者と二千五百人の孤兒を養ひうることゝなりしが此の結果各所に孤兒院の設立となり或は二十、或は三十、五十、百、或は二百三百、五百の孤兒を養ふもの起り今や英國の孤兒院のみにて養ふ所十萬人』と而して彼が事業のみにても六十餘年間に養ひしもの萬人に垂んとせり、彼は實に數千の孤兒の父たりしなり其事業亦

た驚くべき也、而して孤兒院の主義とせし所如何なる事情あるも負債せず一に上帝に訴へて其事業の隆盛今日の如くなるを致せしは更らに驚くべき也此間に於て彼は傳道の事業に從ひ世界各國を巡遊し四十二ケ國に傳道し海陸二百萬哩の傳道旅行を爲せしが如き與に驚くに堪へたり。

（五）

ミューラーは此の如き事業を就げ本年三月十日を以て逝き、數千の孤兒の悲痛哀傷の涙を以て葬られたりき、彼の一生は誠に不思議なり、而して彼の事業は更らに不思議にして、其事業を支へたる方法に至つては誠に不思議なりといはざるべからず。

彼は高位高官の人に非らず而かも其爲せし事業は彼等の企て得ざる所のものを爲せり、彼は富豪に非らず而かも富豪が未だ曾て爲さゞる大事業を爲せり、彼は實に數千の孤兒の父として生き、數千の孤兒の父として死せり、而して彼自ら曰はく余は上帝に祈りて此る金を得、此る事業を成就せりと、人或は彼を嘲つて怪となし、狂となし、或は笑つて以て迷信の徒となす、怪か狂か迷信か我れこれを知らずと雖も彼の成せし事業は現在の事實にして人々の見て驚嘆する所のもの、何人も見て不思議なりと感ずる所、而して此る事實此る事業は唯だ怪、狂、迷信の數字を以てしては解釋すると能はざる也而して彼ミューラーは孤兒院を設立しこれを支へんが爲めに祈禱したるものに非ずして祈禱の功驗を人々に知らしめんが爲めに孤兒院を設立したりし也、而して其爲せし事業は彼の確信の誤ならざるを敎へたりき。

（完）

談叢

笑の話（一）

北斗生

或る人嘗て、余に一幅の書を示して云ひけるは、之れ『天國の略圖』なりと、聽て之を見るに、只世の常なる農家の團欒を寫せしものなりき。冬の夜と思ぼし、爐には火盛んに燃へたり。爐を圍める人々の顔は燃へ揚る焔の光を映けて赤く輝けり。口を開ひて高く笑へるは、七十を越へたらんと思はるゝ翁にて、膝の上に稚子を抱へ、若き妻と十一二の娘とは糸繰りに餘念なく、逞しき夫は老爺の高笑に相槌打ちて笑へる樣なり。彼等は今何事をか語れる、收獲の話か、人の噂か、兎に角田舍に起れる小さき出來事の上を語れるならめ。彼等は各々其性質に從ひ、或は高く笑ひ、或は僅かに微笑を漏らすも、一個として不快の面色をなせるものなく、皆溢るゝ許りの歡喜に滿たされ居るものゝ如し。余は之の圖を見て一たびは友の名けし『天國の略圖』なる名の滑稽なるを笑ひしが、眞に之れ地上の天國なりと嘆じき。笑ふ門には福來ると申す諺あり、蓋し斯かる團欒をば指せしならめ。

昔し歐羅巴の王侯貴人は、常に白痴を侍らしめて、其愚ろかなる擧動を笑ふとを樂とせしかば、世の人其を僑偖となして笑ひしが。今は却て世の人總て笑ふことを喜び年々幾萬の財貨は只笑はんが爲めに費さるゝなり。

笑にも色々あり。心からの笑あれば、又空ら〳〵しき笑あり。微笑もあれば、高笑もあり。其種類こそ異なれ、悉く之れ歡喜の溢れ出づる徴なり。中には嘲笑とて人を輕蔑たる笑あれども、其は例外なり。余は此不思議なる笑に就き少しく語らんと欲す

人は何が故に笑ふや

先づ第一に起こるべきは、此不思議なる痙攣を惹起せしむる機關は何なるべきや、而して如何なる機能が笑の現象を生せしむるやの疑問なり

或る解剖學者は笑の機關に就て左の如く記せり

人類以外の動物は、擽らるゝも無感覺なり。そは人類の如く神經の乳頭狀隆起露出せざればなり。之に反して人類の乳頭狀隆起は極めて淺き所にあり、殊に腋の下に於て甚ばし。此等の神經は呼吸筋肉に運動を與ふべき神經と相關聯せるを以て、擽る事に依て刺擊を受け其都度震動を相關聯せる神經に傳へ、呼吸筋肉を急速に引きつくるなり、之れ即ち笑なるものなりと。擽る事が綠子の時より、兩親保姆等に依りて爲さるゝとは、讀者の熟知せる處なるべし。斯くて彼等は未だ思考力さへ無きに既に笑ふヿを敎へられ、且つ馴致せらるゝなり。

彼等は笑を學ぶと雖も、夫を自ら好むが故に非らず又嘻れしき故にも非らず、只擽ぐらるゝが爲めなり。而して擽る事と笑ふ事との聯想は極めて密接且つ迅速になりて、小兒等は只己れを擽らんとて差し出されたる手を見て、既に笑ふ樣になるなり。

序に世の父母等に注意し度きは、識らず〳〵の中に其愛兒を悪しき習慣に傾かしむるヿ極めて多きヿなり、小兒の時は一寸したるヿにも染り易ければ、能く〳〵注意せざるべからず。自ら小兒の時、悪しき習慣を付けて置きながら、夫を忘れて、全く天性なりと思ふもの多きは悲しむべき事なり。

幼き時の習慣が、大人となりて後迄、固着して變ぜざる例は、笑にあり

吾等は稍々成長して知覺感情を有するに至れば、笑ふと、即ち滑稽なる感情は、快樂なるか苦痛なるかを識別するを苦しむなり。、、、ヲヲス如き快樂と苦惱とが相錯

綜して起ることを感ずるなり、故に吾等は可成早く笑を停止せんと務むるに非ずや。

小兒の笑ふ事及び其惡しき結果

笑ふ時に於て、小兒が大息して喘ぐは、少しく注意すれば、誰にも分かるべし、然かし之の大息する事を以て小兒の喜ぶ徴と思ふは大なる僻事なり。世の父母等は小供を喜ばしめんとて、擽つたり、つゝいたり、擽ぐる眞似をしたり、飛んで見せたり、可笑しき擧動をしたり、黄色なる聲にて叫んだり、手を替へ品を替へて憐れなる稚兒等を苦しむるに務むるなり。

不都合なる親等は無我無心の小供等をいぢめて、横膈膜や胸部の筋肉に痙攣を起こさしめ、其結果呼吸を痙攣せしむ。呼吸の痙攣は次第に甚だしくなりまさりて、始めは大息し遂には聲を發して喘ぐ、愚かなる世の父母保姆等は、之を小供の喜れしさに堪へぬよりする事と心得、益々小供を苦しめ肺臓を痙攣せしむるとこそ、却て滑稽じみて笑ふべし。

斯く屢々小兒を笑はしむる事に依て、遂には呼吸器の一寸としたる狂にも直ちに擽を聯想して笑ふ様になり、生涯笑はざるを得ざるに至らしむ。勿論、笑ふ事其物が無害のものならば、敢て止むるにも及ばざれど、殊に小兒の時に於て其害毒や甚だしく、其痙攣は、遂には小兒に有り勝ちなる全身の痙攣を惹き起こし、是れが爲めに死に至るもの尠なからず、謹しむべきとなり。

又笑は咳嗽と其性質を同ふす、諸君は屢々大笑の極咳嗽たるの例を見るべし。咳嗽と笑とは等しく肺に關係を有す、其肺と腦とに影響を與ふるや一なり、兎に角笑の性質は苦痛にして惡しきものなり。

笑の性質を一層明かになる爲めに、任意的動作と不任意的動作の別を明かになし置くべし。例令へば語る事、歩行する如きは任意的動作なり。彼等は語らんと

欲すれば語り、歩行せんと欲すれば歩行し得ればなり。之に反して嚔、咳嗽は不任意的動作なり、其發作の原因は各、呼吸器（空氣の刺戟に依て規則的に働くものにて不任意的動作）に關係すればなり、笑は即ち不任意的動作なり。

笑と呼吸器との關係

笑の激動は肺臓を膨脹せしむ、而して其激動の止む迄は依然膨脹し居るなり。笑の痙攣の連續する間は血液は肺臓を通じて自由に流るゝ能はず。吾等は激しく笑ふ時頸や、顔や、頭の赤くなりて膨るゝを覺ゆべし。之れ血液の肺を流るゝ能はずして、危險にも血管、動脈等に、阻止めらるゝを以てなり。

人若し數分間肺の運動を停止せば、必ず腦充血を起こして卒倒すべし、過度の運動及び激しき咳嗽の爲めに命を失ひし例多し。

笑は人の天性なりや、

笑の解剖的研究は簡單ながらも、既に說き盡くしたり。今は此說を確かむる爲め世界に其例證を求めんと欲す。笑は果して人類自然の性なるか。

人は天性笑ふべき動物にして、笑は人類特有の直覺力なりとは、既に繰り返し〳〵幾萬人の口より唱へられたる說なるも、彼等眼界の狹少なる未だ世界に笑はざるの人種存するを知らざるなり。人類にして若し笑の動物ならば世界を通じて總ての人種悉く笑はざるべからず。

野蠻人の母は決して其幼兒を擽らず、故に彼等は笑はざるなり。

北米印度人は歐洲人と交通せざりし前、決して笑はざりき。彼等が笑に依て其面色を崩さゞりしは、多くの旅行家の等しく斷言する處なり。彼等は笑はざりしのみならず又號泣せざりしと云ふ。

多年北米印度人の間を旅行したるヂョーヂ、カトソン

と云へる人、其著『汝の口を閉ぢよ』に記し曰く『文明人は驚愕にも、歡喜にも、何かと云へば直ちに口を開くの僻あり、笑ふ時に歯を表はす爲に甚だしく歯を害ふなり。

野蠻人は地震にも雷鳴にも、顔の筋肉に變化を與へざるなり。若し他の刺聲に依りて笑はざるを得ざる場合には手を以て口を覆ふ。去れど注意すべきは彼等の笑は單に呼吸の微動にて、歐洲人の笑と等しからず、印度人は微笑（文明人の語を假りて云へば）するも決して笑はざるなりと。

南洋のニユージランド土人亦笑はざるなり。其他ヒンヅース人、アラブ人亦笑はす。埃及人、土耳古人、西班牙人は激しく笑はず。古代の羅馬、希臘に於ては、笑を卑みたりき。　（未完）

附言前號魚の話未完とあるは完結の誤

大關あさ

上　天　聲

今は昔となりぬ、熊本藩細川侯の奥に局役をつとめ、多くの女中をよく率いて、奥の振肅はかれならではと侯の眷顧はもとより、内外のものに敬はれ、七十餘年の一生を奥女中の浄き生涯に了りたる大關おあさといへるは、水戸浪士大關和七郎の女なりき。此人の身の上筆に多少の綾は加へたれど、事實なれば家庭の談柄にもと記さむか。

風は枝を鳴さず、雨も土塊を壞るとかはと、三百年の夜半の夢、さめゆく嘉永の初年、浦賀沖邊に星の光の旗幟きらめきて來る亞米利加軍艦、日の本の天たゞは晴れ難く勤王攘夷佐幕開港腥き風西より吹きていやな血の雨地に降らむずる時の勢、常陸國水戸は烈公齋昭の城下、殊には人心鼎の湧くが如く騷だちける。

玆に水戸の街に身代細からず太物呉服商して菱屋半兵

衛といへるに今は寄食の身の上、五百石の武家に生れながら、母には去年の春、落り逝く花の行迹悲しき死別れ、父は譜代の食祿を塵芥と捨てゝの江戸に旅行、此家に預けられたるは十三の秋、絹布を木綿に着かへ、お孃樣を町家娘となつて膝襠がけに蝶々髷、我まゝを遠慮に消して萬事ひかへ目の昨日今日、過ぎゆきて十四の春を迎へたり。

父の依囑なればか、朝は某寺に通ひて女大學に平假名つきの御手本、寺小屋の仲間入、腕白ものと一列、歸りては菱屋女房をおばさまと尊稱めて、裁縫の手指南受くる動作も温和に、夜となりては机に倚りて文繙くとを怠らず。室はさすがに一室ものして、去る冬の胼のあと、また消えやらぬ婢の手に、左右の世話を受くれど、侍女とは違ひて、歯がゆきことのみ、褥とりくるゝにも、蒲團はたりと敷きて、其上を輕石のやうな踵に音ざらつかせ、夜着を空よりはふりゆく無作法、枕紙のかけ替もおくれて脂に汚れ易く、行燈の油掃除も動もすれば怠りがちなる、世話のやけたものぞと主婦の叱言も聞くこと多し、總じてのわが身にかくる待遇の、疎かにてはあらねど、曩日には比べがたき不自由の、馴れてはやがて我から働らくが尋常となりしも、親懷しき情念は刹那も忘れず、如何なればぞ大切な御身分無きものにして行迹定めぬ旅の空には出でさせたまひたる、國のため君のためとは仰せられしが、母樣に訣れて程もあらぬに、如何なる事にて御病氣の出ぬとも限られず、思へば此身もお伴すべかりしを、口惜しき事なり、文してと思へども、何處におはすべき消息とては少しも無し、心ならぬ事よと袖に涙の露宿りがちに、思ひの夢路は西の彼方に通ふと多し。

半兵衛夫婦、父の囑みし程なれば、篤實ならぬにはあらねど、根が出入の商人、骨肉の親みあるにあらねば兎角は聊頼なきやうに覺えて、心細きを父に受けたる

勝氣に剛くし、さるほどにさしも春深く、雪消の水に花の影、彌生の月を暦にくりぬ。

昨宵より四隣賑はしく、女小兒の顔容何處ともなくにこ〳〵と笑むやうなるは、上巳の節句來りしなりけり、菱屋も今日は習慣ばかりの雛飾、座敷に列べたるが、小娘のあるにもあらねば、家の徳は質素が第一。三月三日は女子のもの、わが身六つ七つの頃に江戸より人形買うて美しき衣服着せ、乳母腰元を相手に此日をはれに過し、さては母様の琴彈れて樂しまるゝをあどけなう眺めしが、去年は母樣との死別の悲嘆に今日頃を夢と過し、今年の今日は父上に別れて此に寄邊の身の上、世間の浮くにはかなさの一層まして獨り沈みしが、半兵衛女房の、先刻に隣家から、御朋輩さまもあれば、おあさまにも今宵は是非おゐでをと申して參りました、お慰みになること、おいでなされてはと勸めに獨りかくてあらむよ快きにてもなし、行きませふと答へて黄昏頃にその家にゆきぬ。

菱餅五色に列べ供へて、室に三四人の女子、緋鹿子を蝶まげにかけ、笄の花は瓶にさしたる櫻とまがひ、盛衣を蠟燭の火に覩せたれど品格なきは笑止なり、おあさ席につきて威儀たゞしたるさすがは武士の娘、過鋭ある眦に黒き清しき眼、少しくつろぎたる顔容に、皆々どよめくまでに歡び迎へたり。やがて白酒、鮨の重主婦の來て接待すに興もやがて添いゆく、一女の赧ら顔なるが一杯の白酒に頬ほてらし、燈火にいよ〳〵色添へて頭重げに肴とる箸の手の太やかなるを、一女が斜視にして何なをかしきことありけん、遽にふきたし、飯粒喉もとにつかえてうつと咽べば時ならぬ霰たばしるそこらあたり、それをまた可笑しとてふくらかなる頬くづるゝばかりに笑ひどよめき、折角の白粉剝げて、富士額は鹿子斑となりにける、愼ましきおあさもさすがに堪らず笑の海の人となりぬ。

三日もかゝる邪なき遊に過ぎて次の日よりは變りなく寺通ひ、先頃よりおあさ天滿宮に信心して父の安全をひたすらに祈りつ、三月の八日といふに寺通ひの路に、江戸に事あり水戸浪人が云々なりとの取沙汰、近傍の人の言の葉に漏れ聞いて從容かず、寺に行けば毎時に變らず、わやく〳〵と此に一團、彼に一組横なでの袖まくしあげて相撲とるあれば、太筆たつぷりと墨つけて誰かの頬にと覗ふあり、八口釘にかけてぴり〳〵斷れし袖の絲拔いて指さきに捻つて見る、机の角に耳打ちてにぢみし血の氣を嘗めてこりや鹹いと苦いその顏いつかはわつと泣き出したる、おれの辨當箱長さんがぶち碎した、きかぬとむしやぶりつきて喧嘩するあり、それもこれも今宵親どもの叱咤受けさうな腕白盡、おあさの來しを見て、忽ち馳せ寄り、おあささん江戸で御大老さまが斬られた、あんたのお父様が斬つたとよ、強いなあえらいなあと、一人は鼻たれ膝磨にすがり一人は涎の唇ふき〳〵袖をとらへて噪ぎたつに、他事ならず胸ギツクリ、心悸はげしく言は出でず、衆童の顏見つめしが、やがて師の許にゆきて心地あしければ、今日はおひまをいたゞきますと、辭義するも忙しく、寺の門出でゝつく〴〵思へば、今朝の噂さては虚傳にてはなし、歸つて聞かむと足も浮きつゝ宿の門、半兵衛店頭にあつて、如何かなされてとの問、氣分あしくてと答へしまゝ室に入りつ、心配顏に入り來し女房の顏見るより、江戸にて御大老さま水戸浪人に殺されたとか、眞實で厶んせうかと問へば、女房色うごきて、その樣な事、噂は聞きましたがどんなことか分りませぬ、さりながら御大老樣がたわいもなく殺されやうも厶りませず、なんの水戸の浪人さまの事なんぞでは御座りませぬ、お父様にはお變りのないと御案じなされますなと前後そろはぬ言辭腑に落ちず、かさねて半兵衛に問へば、何のそんなと誰が申しました、世の

中が騷かしいので虛說も傳はりますと、これはまた理もなく打消すに、敏き心にさてはいよ〳〵事は眞實にて、夫婦にてわれに秘すと測れば、父上はその浪人のうちに極まりぬ、さあらば御身のうへ覺束なし、もしものとのあらばお顏見るとかなはず、一日なりとお側に居ての上ならば、かね〳〵の仰せわが身も武士の娘なれば嘆きの中にも思ひのこるともなけれど。あゝ如何したらばたつた一見、逢いたしお目にかゝりたし。寧そこれより江戸にゆきておたづね申すが分別、聞けば江戸へは三十餘里、西の方がそれとばかり何の道とも分らねど、聞いて行かば知れぬ筈もあるまじ、よし〳〵天神さまへお詣して祈りて來んと少女心、すぐに戸外に出でゆきて程もなき森の社に至りぬ。

白木造りの拜殿、小さけれど嚴しく神々しき社前に跪つき、祈りはてゝ歸らむとする石段の下に、年はわれより三つ四つも幼き小娘、母と見ゆる婦人に伴れられ、曳れるやうになりて上り來ぬ。白木綿に西國巡禮と記せし上衣、雨泥に汚れ、小さき脚に同じ布の脚袢、足袋の指頭斷々になりて芒鞋それに穿きし姿態、菅笠背にして杖もつ母に縋り、疲れたから休まふと、哀れな聲におあさ他事とも覺えず深く胸を打たれて良久は凝視め佇みしが、心に頷くことありて急ぎ菱屋に歸れば、誰も店頭に居らず、室に通らんとして入れば、座敷にておあささまがとの話聲われ知らず足止まりて聽けば今日の事なり、三日の朝御大老さま斬られ、水戸浪人おあづけになりしと父もその中にあると、夫婦知りながら此身に秘めしことと分りぬ、いよ〳〵行きたし江戸の方にと氣も心も空にありて倒るゝ如く室に入りぬ。

黃昏の色濃く、障子暗うなりて晩飯もすみ、半兵衛眼鏡に帳面繰りひろげ、若ものは側に十露盤控へて勘定の損か得かの金銀仕譯、女房はさすがに京山の草紙膝

にして納戸の方に坐りたり、店頭には丁稚三人何かどよめき、廚には下婢雜巾の針の手やまず、おあさは氣分すぐれずと室にこもりて有や無やに思ひぞなやむ。父上おあづけの身とありてはなほさらに江戸にゆきたし、今日見し巡禮、あの位で旅行するもの、わが身は十四、一念となつたならたとへ山なり海なりとも行かれぬとのあるべき、明朝は人知れず早くこそと思ひ決むれば磐石の精神たしかに、やをら身を起して針箱とり出し、簞笥より白木綿の布片引き出してそれこれと撚りし末、見事作られしは脚袢、裲紐さへ附け得たり。黒塗の文庫より古錦襴の護袋、取り出したる懐劍は、中身が六寸に餘り、赤銅作りに目貫は月に時鳥、斑の入りし朱鞘、是ぞ母の遺物なる、白紫染めわけに打ちたる紐くる／＼と鞘にまき、注意きし程の準備了りて紙に假名文字、深き夫婦の恩義無にするにはあらねど江戸にゆきて父上に一度逢ひたく、斷りなし家出する由、記し遺し、馴れぬ旅路の啓行、思はず時を過して夜は何時しかあけはなれ、遲くなりぬと躊躇ふうち、夫婦もいつか起き出でたれば今はせんかたなくそのまゝ例に變らず朝飯をすまし、小さな包小脇に擁へ、昨日休みましたれば、今朝は早くと、ある程の知恵に虚言をいひて、おぢさまおばさま、來て參ります。

（未完）

家庭

夏の料理

夏のスープ　　てふ子

御露にもあらず、御汁にもあらず、何か夏向の吸物にもと御考へ遊ばさるゝ方々に、ローラー夫人の野菜スープを御紹介致すべし。手もかゝらず金も入らず、一切肉類抜きにして日本人にも容易く出來るとなれば、

新甕青簾の朝の座敷に、一寸風變りの味を試み給ふも亦妙ならん。

松葉うど

善き松葉うど十二三本を取り、頭を切り去り、皮を剝き、八分ほどに切りて五分間程湯がき、水をこぼして此度は鹽少許を入れて三十分程文火にて熟煮し、十分柔らかくなりし時を計りて、篩嚢にてすり漉し（剛くして漉すこと能はずば一應擂鉢にて擂るべし）牛乳三合バタ一匙半を加へ、温飩粉二匙程まぜて、他に煮湯を取り置き其の中に入れ鹽少許を落し、三葉を泳がせて、隨時煖めて用ふべし、香氣ありて風味此の上なきなり。

そら豆、

そら豆の粒の善きものを擇り、鹽湯にて軟かくなるまで熟煮し、篩嚢にてこす事前の如く、之を牛乳五合に解き、バタ一匙、温飩粉二匙を加へ、能く交ぜ合せて、再び絹篩にて細かに漉し、鹽一匙、胡椒少々、玉葱の細かく刻めるものを加へ、入用の時煖めて用うべし。單に蠶豆のみならず豌豆にてもさいげにても善し、玉葱の代りに胡蘿蔔を用うるも妙なり。

豌　豆

此は一番甘きスープなり。先づ粒よき豌豆を一夜水に浸し置き、翌朝水を去り、更に冷水にて暫時冷やして後水を去り鍋に持ち來るべし。而して豆三合に水一升位の割合にて、一時間程文火にて熟煮し、細かに刻みし（叩きたるものにてもよし）玉葱と芹又は三葉を合せ、尙よく煮て篩嚢にかけ、バタ一匙鹽少許を加へ、水にて適宜に解かし、入用に應じ煖めて用うべし、實は菜にても大根にても可なり、鹽の代りに日本流にて醬油を用うるも善からん。

玉　菜

玉菜（キヤベチ）の程宜き處を取りて細に刻み、他に

玉葱の薄く剝ぎたるもの――若し求めらるゝならば芹を二三葉入るゝも面白し――と共に、水を十分容れたる鍋に鹽一匙ばかり加へて煮、菜の色の透き通る樣になりたらば、湯をこぼして篩嚢に掛け、漉されたるものには更に牛乳五合程加へ、バタ四匙溫飩粉二匙と合はせて、能く町にて賣り居る鷄肉ソップ交ぜ、必用の時宜い加減に分量して、更に鹽一匙と胡椒少許を加へて煮るべし。玉菜の味ひと牛乳バタを混和して餘程結構なるスープとなる。若し只の玉菜に代ふるに赤キャベヂを以つてすれば、スープの色赤くなりて、美しき事も此の上なきなり。何か實をと思ふ時は、只の玉菜には矢張り胡蘿蔔がよかるべく、赤キャベヂには、胡瓜が妙なり。

胡蘿蔔、

中位の胡蘿蔔(西洋流に朝鮮胡蘿蔔を用へば大ひに善し)を細かに刻み、三葉、妨風、少しと共に文火にて一時間ほど熟煮し、バタ二匙、溫飩粉三匙を加へ、スリ鉢にて善くすり、牛乳五合ほど加へ、再び火に掛けて少しドロドロになるまで煮るべし。而して煮へ上りたる時は絹篩にて一應漉し、鹽一匙半に胡椒半匙程交ぜて膳に上すべし。

三つ葉

是も風味のよきスープなり、先づ三つ葉の莖のみ切りて、善く煮つめ、擂鉢にて擂り、絹篩に掛くること、凡て前に同じく、漉し上げたるものは更に五合程の牛乳にて暖ため、バタ三匙溫飩粉四匙(溫飩粉は入るゝも入れざるもよし淡薄なるを望まんには入れざる方勝れり)を加へ、膳に上す時鹽と胡椒を適宜に加へて用うべし、又牛乳やバタが嫌ひと云ふ人々は、此等のものを一切拔きにし留三つ葉のみのスープに、河魚の淡薄なるものを見繕ひ、鹽の代りに醤油、胡椒の代りに味淋を一寸たらして用ゐなば、上等の日本料理となり

御客なぞに出して尤も妙なるべし。

菠薐草

料理の妙は單に口に善きのみならず、目にも亦美くしかるべきを要するものとすれば、菠薐草のスープの如きは、其の最上に位すべきもの歟、色は青くして味は一種菠薐草的の風雅を存じ、バタと牛乳を除けば、三つ葉と同じく日本料理として最上等なるに於てをや。其の調理法は先づ枯葉のなき菠薐草十二三本を取り、能く洗い細かに刻み、他に煎鍋を火に掛けてよく暖め置き、刻みし菠薐草は十分水を切りて此の鍋に入れ、嚴重に蓋をして五分間程蒸すべし、蒸し了らば蓋を取り水をたみて、擂鉢に移し、能く擂りて、牛乳五合程加へ、再び文火の上に掛けて次でバタ二匙温飩粉二匙程を入れ、例の鷄肉ソップに割合せ玉葱か何かの粉かく刻みたるを實として用うべし。凡て西洋料理にては、スープの實と云ふ事は殆んど之なき事なれども、日本人は箸にて吸ふ事故何か箸にかゝるものなければ氣が濟まぬ様なる心地するものなり、然れば凡てのスープには其の時々何か有合せたるものを見繕うてアッサリ浮ばするをよしとす。但し豆腐や南瓜、薩摩芋の類は論外の事と知るべし。

馬鈴薯

キメのよき馬鈴薯三つ程取り、皮を剝ぎ薄く切りて一應湯がき、更に煮立てたる湯の中に入れ、三つ葉か芹其の他何にても一寸香味のあるものを合せ、薯の軟かくなるまで煮るべし。而して十分軟かくなりし時は取り出して篩に掛け、若し芹三つ葉等の莖剛くして漉す能はざるものあらば、只其の汁を絞るのみにても可なり、兎に角能く交ぜ合はせ牛乳四合を加へて、再び火に掛け更にバタ二匙温飩粉二匙を加へ、能く煮へたる時を計り食鹽を適宜に入れて用うべし。但し此のスープは初めに湯がく時能く湯がゝざれば、スープがエゴ

くなることあり、縦令又エゴくならざるにせよ少しヒツコクして好かぬ人もあるべけれど、滋養分を含める事に於ては恐らくは第一ならんと云ふ。

かぶら

先づバタ一匙を鍋に布きて、薄く剝ぎたる玉葱一つ同じく胡蘿蔔二ツ三ツを入れて、玉葱の黄色になるまで焼き、更に蕪又は大根の餘まり實の入り過ぎぬものを細かく刻みて入れ、水は只其の蕪大根より出づるもののみにして能く炙るべし。斯くして稍廿分程も立ちし時、牛乳二三合を入れ、暫らくして又バタ二匙ほど加へ、温飩粉も若し好まば二匙ほど入れて、十分煮〆め、後凡てを擂鉢に移して能く擂るべし、而して擂りたるものをば例の如く絹篩にて漉し、鹽と胡椒を加へて食ふべく、黄菊の一寸湯をくゞらせしものを浮ばすれば倘面白からん歟。

とまと

赤茄子は三杯酢にしてさへ、日本人は兎角厭やがるもの故、其のスープは或は如何かとも思はるれど、一度味を覺えたるものは、口が臭くなる程食はざれば止まざる程のもの故次手に一寸書き記すべし。乃ち赤茄子の能く熟せるもの四つに水三合の割合にてつゝき潰し、玉葱の薄く切りたるもの一二片三ツ葉か芹二三葉を交へ、バタ二匙ほど加へて煮立つまで火に掛け置き、煮立ちたれば絹篩にて漉して、塩なり醤油なり適宜に加味し、程宜き實＝馬鈴薯などよからん＝を見繕いて用うべし。燒パンの菜には尤も適當なり。

話のくさ〴〵

夏の洗濯

黄　花

色を褪まし地をあらす患なき安あがり洗濯法は、糠を切につゝみて水に打ふり糠汁を拵らへ、洗濯物をこれ

に浸し、汚れに日光のあたるやう上にむけて暫時日向に放置すべし。汚次第にうかみくれば幾度か打ふり洗ひ、後清水に注ぎ、絹めりんすなどはしぼらずして干すなり。試み給へ。かくて絹に糊をつけ或は張板にはるにはごく／＼薄糊にせざれば地を損し易し。又張る時他の絹切にて表をよく摩擦すれば新らしものゝの如く艶いづべし。

墨のつきたるは御飯粒をすりつけてつまみ洗へば容易く落つるものを少しの事を面倒がりて墨つきたるまゝの浴衣などを小兒に着せたるは母親の不行屆も思はれてみにくし。

折角の美しき海色の單衣も帶の下、膝のおれめのところなどに汗のしみあるは誠に品劣りて見ゆ。汗は直ちにあらへば水にて落つれど時經てはなか／＼むづかし。これは藥店よりアンモニアを求め、これに浸しあらはゞ見事に落つべし。つまみあらひの時は用心せざれば水ぎはつく恐れあり。西洋紙をあて熨斗もてかわかさば此患なかるべし。

一般には渡らねど海邊に避暑などせらるゝとき、木綿物の洗濯にはわざ／＼石鹼など要なかるべし。海水をくみてしばらく浸しほ洗へば白地など眞白に落つ。これを清水によくそゝき干せば可なり。

思ひかけぬ病根

夏は流行病などの恐れあれば何處の主婦も室内臺所より物置椽の下水はきなど隅々まで奇麗に掃除し、食物料理の撰擇、衣服の洗濯等彼是と注意に注意せらるゝ事なるべし。かくて心安く思ふ折しも不斗子供に下痢腹痛など起り、心配の餘り子守下女はては愛子までも詰問せらるゝ事あり。さて醫者の診斷によれば全く腹部の冷えしより起れるなりといふ。顧みれば昨日餘り暑かりしゆゑ腹卷さるまたなどとりさり、夜も其まゝねかせしなりき。氣の毒なは子供女ともなり。思ひか

けずも病根は主婦の不注意にありしなり。

すべて夏は着物うすきゆゑ老人子供は必ず腹巻をなすべし。かりそめの下痢腹痛も流行病の源因となり衰弱の始めとなる事あるべし。注意ゆるみしときほどいろ〱のわづらひ起るはなし。責重きは主婦なりかし。

蟲の螫す時

蚊蚤などの刺しゝをむやみにかくときは腫物のやうになる事あり。大したる事ならねど小兒などは痒をまことにいやがりて氣分までもあしくしてよろしからず。藥店よりアンモニア（水溶液）一瓶もとめ臭氣を消すために香水を混ぜ痒きところにすりつくれば忽ち癒ゆべし。子供に注意する家庭にては海水浴湯浴などにゆくに亞鉛華、アンモニア、ビスミツトなどの用意周ねく怠らず。

蜂虻などの刺しゝ時は鹽をつくれば直ぐに癒ゆ。又干柿を刻み酢に浸し貯へ置きて其都度傷口にぬれば、まのあたりはれも減り痛も去るべし。

夏より秋にかけて旅行登山また草叢跋渉庭の手入などするときに、注意すべきは蝮なり。暖かき海邊などにては開けたる畠庭などにも往々あらはるゝものなれば、心すべし。もしこれに嚙みつかれしときは、別の人（被害者にあらぬ）杉の上皮を去り内なる甘皮をはぎとりて、齒にてがち〱かみやわらげ、傷口にはりつけやるべし。忽ち毒を吸ひとりていたみ止む事驚くべきほどなり。かゝる覿面の効あるものなれば、被害者自ら甘皮をかみやわらげんか、毒は口の方へ吸はれ齒ばろ〱に落つべし。されば他に人なき時は石にてたゝきやわらめ、決して傷口の外自分の躰にふれざるやうすべし。また鹽柿をたゝきて傷口につけるもよし。すべて鹽は毒蟲の螫したるに効あり。

家庭片々

蒲 公 英

○此頃物價騰貴の影響を蒙らぬ家庭は多くあるまじ、或は終日糊口のため汲々として寸暇もなく、さて其勞れし身躰を休むべき夜中と雖も、如何にせば此際我家族の衣食に不自由なき様にすべきやと生計上の問題には其腦髓をなやまされて安き夢さへ結び得ざる哀れなる人も尠からざるべし。よし左までの困難を覺えざる家にても物價騰貴の爲には非常なる節儉を要すれば、家事經濟を處理するの任ある主婦は、間々不自由不足を感じて思はず知らず歎息の聲を漏すこともあるべし、斯る時こそ世には嚴寒肌を刺す候にも、其呼吸する空氣の外は一物も我ものとして所有する權なきほどの赤貧者も多くあることを思ひ見るこそよけれ。我等能々考へ見れば必要なり、なくては叶はずと口にする物の多くは、外見の躰裁をつくるためか或は從來の慣例故必要なるが如く思はるゝのみにて少しの不自由を忍つゝ實際はなくても事すむもの多しさる物を省きたりとて實際饑寒に迫り居る人の身の上と思ひ比ぶれば、決して不平不足を云ふべきに非ず否衣食に事欠ぬ身の幸福なるを謝し且つは應分の施與をなさんことを心懸くべきなり、實に眞の慈善家たらんには己が身を節し望ましき物も求めずしても、貧しき同胞を補助し又場合によりては己が身を温むべき衣の一枚を脱ぎて寒氣に慄へ居る人に着せしめ己が一飯を減じて饑渇に迫り居る人に食せしむるの必要もあるべし其報酬は無形ながらもいと貴き善事をなしゝ心の滿足、喜悦てふものなり、然れば心の持ち方次第にて萬事節減を要すべき餘裕なき家産にて不自由を覺えずして足れりとし且又眞の慈善家たるの樂しみを味ふことを得べし。

○禮讓親切義俠等は人に欠くべからざる諸徳なれどかゝる氣性の有無强弱は多くは母親が其幼時心に種子を

蒔くと否とに由るものなるを忘るべからず、此處に一人の小兒木片もて家屋を搆造せんと一心こめて積み重ね居らんに母親は其傍を過ぎ行く際いと無頓着にも衣の裾を觸れしめて咄嗟の間に悉皆打倒せば小兒は已が骨折りの忽ち水泡に歸せしを惜みて怒り泣き出さんに母は逗は悪しき事をせり宥し給へと、一言の詫言はおろか振り向きもせず過ぎ行きたりとせんか、此小兒成長の後粗暴無礼にして如何に人の感情を害するも毫も意とせざる人とならんは敢て怪しむに足らじ、家庭は人の品性行儀作法を形ちつくる塲所にして母親は主として其摸範となるべき人なれば、一擧手一投足にも注意すべきことにこそ。

○修繕てふことは、婦人の心掛くべき最も必要なる業なり。別て衣類を見、よくつくろふとは是非心得置くべき手藝なれば、女兒ある母親は必ず此業を敎へおきて、旅行する時他家へ寄寓する時、或は學校に寄宿する時は、必ず其衣類と同じ小切を携へ行かしめ、以て衣服の切れ裂ることとあらば、直ちに繕ふことを怠たらぬ樣命け置くべし、婦女子の身にして衣服の損せしを、其まゝ着し居るほど見苦しきことは非じ、男兒にもボタンを縫い付る位のことは敎へおきたらんには、シャツ洋服を着用すること多き今の世には、便利少からざるべし。世の富者にして一度衣服の汚れ或は破損する時は其儘婢僕或は貧民に與へ己れは金錢のあるに任せて新衣を調へ洗張修繕等は嘗て爲しゝことなき人あれど、こは賞むべき習慣には非ざるべし妾が友嘗て一枚の古き衣服をある貧しき小兒に與へしに其母は其衣のいと丁寧につぎてありしを見て、不思儀そうに「御身**の如き御身分にても猶斯くは衣類をつぎ給ふかと」**申しければ我友は「さればこそ今の身分にはなりしなり」と答へけるが實に理りある言なり。

○小兒は殊に想像力の強きものなれば、何事にもあれ

想像力を誘起するに足る事は、能く小兒の注意を引くものなり、かの英雄談や名婦譚等は最も能く小兒の想像を引き起すものなれば、常に之を語り或は讀みきかする時は彼れ耳面白く聽き居る間に、漸く其高尚偉大なる人物を敬慕するの念を起し、遂には其人々を意中の朋友となし一方ならぬ感化を蒙るに至るべし、實に良善なる書物は小兒に取りての最良の友なれば、父母にして其業務に忙はしき間にも尙ほ寸暇を得て兒等の能力にて解し得る好き書物を撰びて讀みきかせ、以て世のあしき娛樂の味を知らぬ間に、讀書の趣味を養ひなば其生涯を益すること少からざるべし。

小說

疑問

金子笹下庵

何時の日曜日であつたか、自分が大磯停車場で、夕方の上り列車を待つてゐたことがある、殆ど一時間近くも間があるので、自分は停車場前の小松の間を左にでたり、右にぬけたりして、時を移してゐた、丁度三十回もかやうにやりつゞけたのち、自分は甚く疲れて、立ちとまつて、見るとはなしに滊車の來るべき方角を眺めた、けれども何の影だも見へなかつた、それもその理である、時計を見れば出發までは、まだ二十五分をあましてゐたゆゑに、――

自分はがつかりとして厭氣になつて、はてはまた停車場にもどらうとして、ふと後を見かへると驚くまひことか一人の婦人、――若くて色の凄いほど蒼白い瘦せた婦人が何か少さな包を胸にあてゝ、自分の方を頻りと見詰めて居つた、日はとうに落ちてしまつて、四面はほの暗く、二人の間は僅か三間もへだてぬのに、はつきりとその顏を見ることが出來なかつた、自分が驚いて、ぢつと見かへつたのを恥ぢてか、あらぬか、女

は直に面をそむけて、うつむいてしまつた、で、ひそかに思へらく「はて何者だらう」。

* * * * *

客呼ぶ鐘は鳴らされた、汽笛の聲が微に聞へた、自分は急いで、切符を買つて、プラットホームに待つ間もなく、汽車が着いたので、先づあまり混まぬ處にはひつて、一つ腰掛を一人占めにしやうとした、が後から後からのりこむ者が多くて、見る間に一ぱいになつて餘すところは、最はや自分の對ひの客の大きな荷物の載せてある半分と自分の座の半分である、漸く混雑が靜つて入口が閉された時、

「こゝがあひてます早く、こゝが一つ早く」、

驛夫の聲と共に又戸が開かれて、はひつて來たものがある、婦人だ、而も今停車塲前で見たその同じ婦人、で、自分が腰掛の半分を貸してやると默禮して座つた、髪は極く、そんざいな夜會結に結びて、羽織は何やらの黒の一つ紋、着物はかすり織り双子のさつぱりとした目だゝぬ縞で、帯は黒繻子にめれんすの晝夜を締めて、何處から見てもぢみな平生着そのまゝらしく、飾つた服装とは見られない、が指環は黄金である、うちきりの極く品のよいのが一つ左の手の藥指に光つてゐた、一寸見れば女學生とも思はれて、能く能く見ればもはや人の細君であるかの如く、何れにしても何處かに品のある賤しからぬ、少なくとも四五年は今の教育を受けたものとは見られた、自分はうつむひてゐる婦人の髪の毛から、下駄の端まであらゆる點を見盡ししらべ盡して、少し厭氣が來たので、窓から頭をさしだして外を眺めると陰暦十八日の月は隅なく照りわたり、黒づんだ大山の影を直ぐ目の前にあらはして、平塚藤澤間の――俗に云ふ南湖の松の並木の青々とした葉の上に殊に趣を添へてゐた、間もなく汽車が藤澤に着いたので、自分は初めて吾にかへり、頭をいれて婦

人を見ればまたうつむいたまゝである、で自分は又も心をこれに奪はれて、再び眼をみはつて例の點撿をはじめた、

突然、婦人は手に持ちし手巾を眼にあてゝ、又とつて、膝に手を置いて、のびあがつて、力なき溜息をもらした、かと思ふと忽ち袂から何やら手紙やうのものをとりだして、固く握つて、また開ひて表面を視つめた、自分は見るともなしに視線をそゝぐと認め得たのは相州大磯町櫻井しづ殿

果然、婦人は東京のものではなひ、かしら、櫻井とは婦人の姓であらうか、さりとも別人か、ゆく處はいづこ、婦人はまたのびあがつて、宛も耐へられぬといふやうな嘆息をして、手巾もて顔を覆ふてしまつた、忽にして手紙をとりだし、忽にしてまた握り、忽にして嘆息し、忽にして手巾もて顔をかくしては泣く。

＊　＊　＊　＊　＊

「横濱」、「横濱」、

二聲、三聲、呼びゆく車掌の聲の聞へた時はもはや婦人の姿は見へなかつた、交代に這入つて來たのが二人の職人體の男で、自分の前に座を占めた、

「うむ、それがどうしたと云ふんだね」、

何か話しながら來たものか、一人の男は宛も熱心らしく大きな聲で口を開ひた、

「まあ心中だの」、と一人が答へて少時考へて「己もよくあ、知んねえがの、あのほら髮結のおそめ婆なあ、彼奴が己に話して聞せたがの、相手の女はまだ二十二ださうだ、若けいちやねえか平生は小女を使つて男は時々來るといふやつさ、え、その男が、それあ大磯のかなり財産ある櫻井つていふ家の若旦那で、立派な奥様もあるんだがの、唯つた一人の、繼母のおふくろてい奴が强氣と意地惡く、それあ一と通や二た通ちやねえつての、そんなことから、自分の家

がおもしろくなくなつてよ藝者狂ひを初たんだの、たまつたものぢやねえや、男はよし、年は若し、金はある、女もとろけずにやゐねえわの、………到頭宮崎町の己とこの上の家を借りたんでさ、圍ひものときめこむわけになつたんだの、それから三年も經つと金もさうさうは續かず、奧樣にや感づかるゝ、せつぱつまつての始末だつて云ふがの、何しても後へ殘された奧樣が可哀相よ、うむ、奧樣が、まあだ何にも知らつしやるめえわ、可哀相に、旦那も旦那だが死んだのは一つは奧樣へわびのためだつてえからの、ヘッ姑婆のがうつくばりめ、己が親類でゝもあれあ默つちやゐねえがの……」、

言葉が少し激して來た時、一人の男はさへぎつて言つた、

「ぢやあお前とこの阿さと樣と同じわけえいだね、ふむ可哀相に」、

「そだからのお前、……矢張姑からだわの、えゝ姑からだ、いめえましい、他人事たあ思へねえわ、うむ……」、

汽車は神奈川につひた、話はとまつた、二人の男はつれだつて出て行つてしまつた、自分は一人殘されて、ぼんやりとして、今の話をくりかへしながら考へた、

「はてあの男は何だらう」。

（をはり）

おとめの記

橘亭主人

三年の勞働を了へて此頃歸つて來た五人のものは、先きつ頃死亡せしおくま、仁三郎の病狀を其遺族に傳ふると共に、三五郎の死亡せしわけを左の如く語つた。

三五郎が彼地に着き會社に傭はれたるに其働き樣は實に勇壯しきものなりき、朝五時に起きて業に就き、夜八時まで休憩の時間までは午食の時より外なきにも拘

はらず、彼れは拮々として脇目も振らず、骨を粉にし身をくだくも物の數かはとて他人に先じて艱難に赴き、衆に挺んでゝ勞苦多き仕事を受負へり、且つや移住者の多くは一日の汗を以つて直に其宵の酒に代へ、唯だ今日あるを知つて明日あるを知らぬ輩のみなれども、三五郎は是等の流に沈まず、自ら毅然として大勢の中に立ち、酒一滴だも口に附けず、請取りたる金は其都度社長に預け措きぬ、放蕩なる其周圍の人々は痛く彼れを罵りたれど彼れは日本人中の花として社長は確く信用しければ給金は年を追ふて増し三年目の夏には、衆人の二倍半となりて日本人中三十名の組頭に昇りぬ。

頃は昨年の十一月一日、會社は其製造品の材料を運搬せんが爲めに五艘の船を群島中の一に出せり、彼れは此時其一艘に乘込み居たるなり、歸路は三日目にして即ち十一月三日の日なりき、昨日まで朗かなる空も今日は一天曇りて穩かならず、風脚ます〳〵荒くなり、逆浪船舷を掠むるに至りぬ、今は水手の苦心も、舵手の經營も、悉く無益となり他の四艘と速く離れて果ては行衛見へずなりぬ、嗚呼五艘の中には代はるべき船もあらんに、此處に漂ふ一艘は三五郎が乘込みたるものなりけり。

其日の夕刻揉みに揉まれて疲れ果てたる此船は、遂に突起せる岩礁に觸れ碎かれぬ、木片に縁りて辛くも生命を保ちしもの三人ありしが、三五郎の顔は其中にはなかりき、悲しいかな彼れは海底の藻屑となりしなり。

此物語と共に三五郎が死ぬるまで蓄へた二百圓と、社長より吊慰金として與へられたる百弗とを合せておとめの手に届けられた、併しながら今は如何なる寶を得るといへども、おとめには涙の種となるばかりだ。

三五郎の客死を聞て痛く老いの心を挫たれしは本家の

實父である、彼れは其姦ましき妻の爲めに父子相言はざると數年なれども、是は妻故の事で三五郎が兼ねて父を懷ふ如く、彼れも亦其子を一日とて忘れる事はないのだ、彼れは此凶報の到達を聞くと共に最早や鍬一つ採ることもせず、終日一室に打臥して六十日許りもありしが、遂に敢へなくなつた、村民どもは孝心なる三五郎が冥途より招ぎ寄せたのであると陰げで噂をする。

月日に關守なく、今や今津川の流れは幾夜かおとめの枕頭を濕ほした、三五郎が遺せし無果花樹の夕日影は幾回か長く地に投げた、曉を告ぐる八幡宮の大皷、暮を報ずる萬行寺の鐘の音も、味氣なき毎日の空に送くられて消へ行く、空に飛ぶ鳥、野に咲く花、幾たびか其裝を替へたれども、河端なるおとめが家の棟よりは、いつも寂しそうな烟が咽び出るばかりである。

おとめの境界は秋の山を眺めるやうに悲しい、淋しい、手緣のない生活であつたが、其可愛らしい周造が三五郎に生き寫しの笑窪に愛嬌を浮べて笑ふ時は、愛情にそゝのかされて春のやうな心持になる、今は周造は語も能く出來る、歩行も差支ない程までに成長して、近所の小供軍の一員に加はり其末列に置かるゝ、家に居るときは大皷手拍子、笛などを弄び、倦みたる時は母の乳房に縋がつて眠るが、外に出て兒童の群に入れば優しきまゝ事の遊びか又は腕白大將の號令に隨つて猛けき戯れをなし、或は淺瀬の水を堰き、或は跣足にて蜻蛉を逐ふ等、其苦もなく愁もなき稚な心が、覺束なき動作に現はるゝを見る毎に、おとめは愁いも一時忘れてしまう、其れを抱き、其れを背負ふて、道を歩きつゝも彼兒が田植の歌を眞似るを見し時、おとめは己れが寡婦たることも忘れて、其れを差し揚げ又は左右に振り回はして彼兒が嘻々として笑ふのを樂しみにする、全然周造を己が友達の樣にして戯むれる。」

此くして三五郎の死後二年は過ぎた、周造は今年六才となり最も健康に、最も怜悧に生長したおとめの父は三五郎の遺產を以て充分なる智惠を彼れに播き與へむと常におとめに話した。

※ ※ ※ ※ ※

おとめは苗の秀づる速かならむを望むが如くに、周造の成長に一心を籠むるの外一の望はない、併し乍ら其周圍に立つて居るものは、おとめの爲め且つは牧田三五郎の家の爲めに一の請求を持て居る、其れはおとめに再緣を勸むる一條である。

村中の知人等は年若き彼女に此儘やもめ生活をさすのは不便にもあり、小金のある牧田が遺族に一人りの男氣のないのは、誠に不用心なりといふ懸念であつた、誠に尤もの次第だ、故に此節おとめの耳に入るものは再び他家に緣付くか、又は第二の夫を迎へて牧田家を此儘繼いで行くかの二つに就き勸告の來るのである、是れは世話好きなる綿屋の爺父も說き、村夫子なる吉田先生も說き、眞福寺の隱居も說き聞かした、されどもおとめは之れを聞く每に、盜坊でもしろと勸めらるゝが如くに身の毛も逆立つてずんとするやうに思ふた、そして遂に泣く、あなた方は由ない事を勸めらるゝものかな、妾は三五郎ぬしに對して申譯なしと、答へる許りだ。

親切なる老人等が數度の說法も悉く水の泡となつて打消され、流石の村夫子も烈婦として手を控へ給ふ、千圓に近い財產を目的として聟入の裏面運動をなしたる村男等も遂に失望の外はなかつた、實に地下の三五郎は萬歲だ。

此かりし時におとめの上には一の紛紜事件が降つて來た、其は本家なる三五郎の繼母より其遺產千圓に對する干涉事件である。

畢竟渠れ繼母は三五郎を逐い出した後、已が實子に家

を繼がせ本來の望みは達したが、三五郎に對する憎惡の念は決して消へない、彼れが別家を建てゝのちも、何卒其上に悲運惡運降れよかしと、神に願をかけて祈つてをる位いだされば、三五郎が商賣で損毛を招いた時に彼は小躍りして欣んだ、其志を立てゝ布哇に往くと聞いた時は冷笑つて人々に惡ざまに話し、出立の後も、荒神の宮の柱に三五郎の似顏を貼付けて、其上に釘幾つとなく打ち付け、目鼻の嫌なく咒ふたと村人の間に一時噂された、然るに三五郎は一年二年と經つ中に大枚の金子を送つて來るといふことを聞いて、心甚だ平ならず殘念でたまらず、思つて居たところが、その咒咀がきいたともいふべきか、三五郎は汗膏で蓄めた金を殘して一朝客死の人となつた。

年若き軟弱きところの女や子供に大金を保たして置くは危險千萬てふ口實と、之を保護して行くには本家たるものゝ義務なりとの理由を以て、さては此干渉を始めたのであるが其眞底は固より言はでも分かつて居る。」

無遠慮なる干渉に對しておとめ幷に其生家は反對した、村人の多くも本家の慾婆が雛兒の羽を攫みはじめたとて陰で謗る、段々日數を經るにつれて紛紜は結んで解けず、其內には三百代言が飛び込んで煽動するので裁判所へ持出さなければならなくなつた、おとめは實に心配した、先方の惡計策の爲めに、遂に此方が負けはしまいかと思ふゆへに。

村に一人の學校教師がある、九州の者なれども、昨年の春零落して此地に來り、村の戶長に事情を訴へて救助を乞ふた、戶長は元來慈悲深い人なりしゆへ緣もないものなれども其のまゝ家に寄食せしめた、彼れは年齒二十四五で、多年東京に書生した身ゆへ、普通の學問に通じ世間にも明るかつた、村民等が世界第一の書物と仰ぐ四書、十八史略、日本外史の如きものも、恰も堅板に水を流すやうに讀んだゆゑ、村では學者物識

りとして崇められ、やがて漂流の後村の教師に推薦せられたのである。

今おとめは事の勝敗の判決を仰ぐものは唯だ此教師より外にないのである、おとめは實父と共に一升入りの酒德利を携へて事情を其前に訴へた。

教師は此憐れなる二人に向つて決して敗者に非ざることを告げ、且つ自分も一臂の力を添へんことを陳べた、二人の喜は如何ばかりであつたか。

本家の繼母は三百代言の族といろ〳〵事を搆へて爭ふたけれども、此遠藤といふ學校教師の辯論に打ち伏せられて遂に手を燒いて了つた、おとめの一身は無事に援けられ、三五郎の汗膏も危ぶない所で救ひ上げられたのである、おとめは何れ程嬉しかつたか、おとめの父は嬉し淚を拭ひつゝ、箇樣な能く出來た人でも矢張落魄るといふことはあるものか、世の中は薄情のものだといふ、況しておとめの胸中には幾萬倍の感謝の情、淚、血があつたか誠に量り知られない程で、生命の救主と仰ぎ敬つた。

かくて學校教師の遠藤は此の弱者を助けた成功に依つて、村中の評判も一層良くなり、遠藤先生と云へば誰れも神樣の如くに想ふ、そして、誰も赤心を捧げて一にも二にも遠藤樣といふて慇懃を盡すのはおとめの家であつた。

（つゞく）

古釣瓶

岡田紫櫻

（一）

げにもゆかしや　ふるさとの、
けしきぞいまも　しのばるゝ、
しのぶこゝろの　おくふかく、
うつるは里の　かのもりよ、
かの野よそのよ　かの川よ、
をさな遊びの　彼處其處、

かしこの池は　いとひろく、
傍に水車も　ありたりき、
彼の楢行きて　彼の山よ、
こゝには瀧の　かゝりたる、
吾が父上の　その住家、
裏にありける　かのむまや、
井戸にかゝりし　釣瓶さへ、
いとあり〱と　みゆるかな、
彼の古つるべ　かしの木の、
鐵の金輪の　かゝりたる、
水こけむせる　ふるつるべ。

(二)

苔いとあつき　彼のうつわ、
これこそ我の　寶なれ、
日中のあつさに　あへぎつゝ、
野よりかへりて　幾度か、
げに美しき　げに潔き、
盡きぬたのしみ　得たりける、
我はこよなく　よろこびて、
ふるふもろ手に　とりもちぬ、
もちし器は　忽ちに、
白き小石を　しきつめし、
井戸の底にぞ　おちにける。
「眞理」の記號　あふれつゝ、
滴るつゆも　凉しげに、
釣瓶はまたも　あがりけり、
彼の古釣瓶　樫の木の、
鐵のかなわの　かゝりたる、
水苔むせる　古釣瓶。

(三)

あはれ器の　かたむきて、
吾が唇に　つけるとき、
こけいと深く　みどりなる、
緑よりのみし　その水よ。

かしこき神の　めし給ふ、
神酒を盛りたる　盃を、
與ふる人の　ありとても、
我この水を　すてざりき、
古郷遠く　迷ふ身の、
父上とても　住ひてし、
昔しをもへば　衣手の、
ぬるゝもしらぬ　涙かな、
あはれかしこの　彼の井戸に、
つるべはなほも　かゝるらん、
彼の古釣瓶　樫の木の、
てつのかなわの　かゝりたる、
水こけ蒸せる　ふるつるべ。

（完）

夜行列車

枯林子

六月つごもり、富士の嶺ににほひし夕ばえきえはつる頃、急行の列車にのりぬ、夜行なれば人少くていとゆるやかなり、」御殿場にて日は全くくれはてゝ箱根路にかゝりし頃は、馳せゆく雲間に折々日光を仰ぎ、樹蔭影暗きあたり時に螢とびかふ、

酒匂川くだけて白き波の上に
　月の影こそてりまさるなれ。

つゝやみの箱根路をわが越えくれば
　道しるべして螢さびかふ。

谷川にうつりて千々にくだけゝり
　一つ山家の燈火のかげ。

影くらきはこれの山に雨すきて
　高くもすめるなつの夜の月。

くらき夜のはこれのみれに飛ぶ螢
　星かとばかりあやまたれつゝ。

夜車のすくろひゝきに里川の
　渚のほたるちりみだるなり。

夜くろまもまたおもしろし谷川の
　蛙の歌を月にきゝつゝ。

見渡せば水遠白し燈火の

きらめくかたや小田原のさゝ。

月てりて箱根あしがら影あはし
わがこえつるはいつこなるらむ。

遠方の里は火影にしられつゝ
ちまちた白し夏のよの月。

傍の老人俄にわれに向ひて、歌をよみなさるかねわしも一つ狂歌をよみましたいやはやどうも」

急ぎゆく車にしあれは大磯も
大いそぎにてはせにはせゆく。

大聲にて歌ひいでしかど車のひゞきにかつ〳〵きこえたり、弟共の箱庭の材料にとて沼津の千本松原よりこぎきたれる松のめばえ百本ばかりのふろしきつゝみを枕となしつゝいつしかもねぶりぬ、

これをこそ草枕さはいふべけれ
夢を小松の根にしむすべは。

小夜ふけてれしつまりたる村里を
靜かしつゝはしる汽車かな。

草枕むすぶさもなくさよふけて
つろみのさゝに月かたふきぬ。

いづれもおもひつゞくるをうちつけに三十一字にならべしものなれば何のふしもなしたゞ其折々の興にまかせしのみ。

雜録

女子の書簡文（五）

吉田松陰が野山の獄中より妹千代子に與へし文

伊那六頁

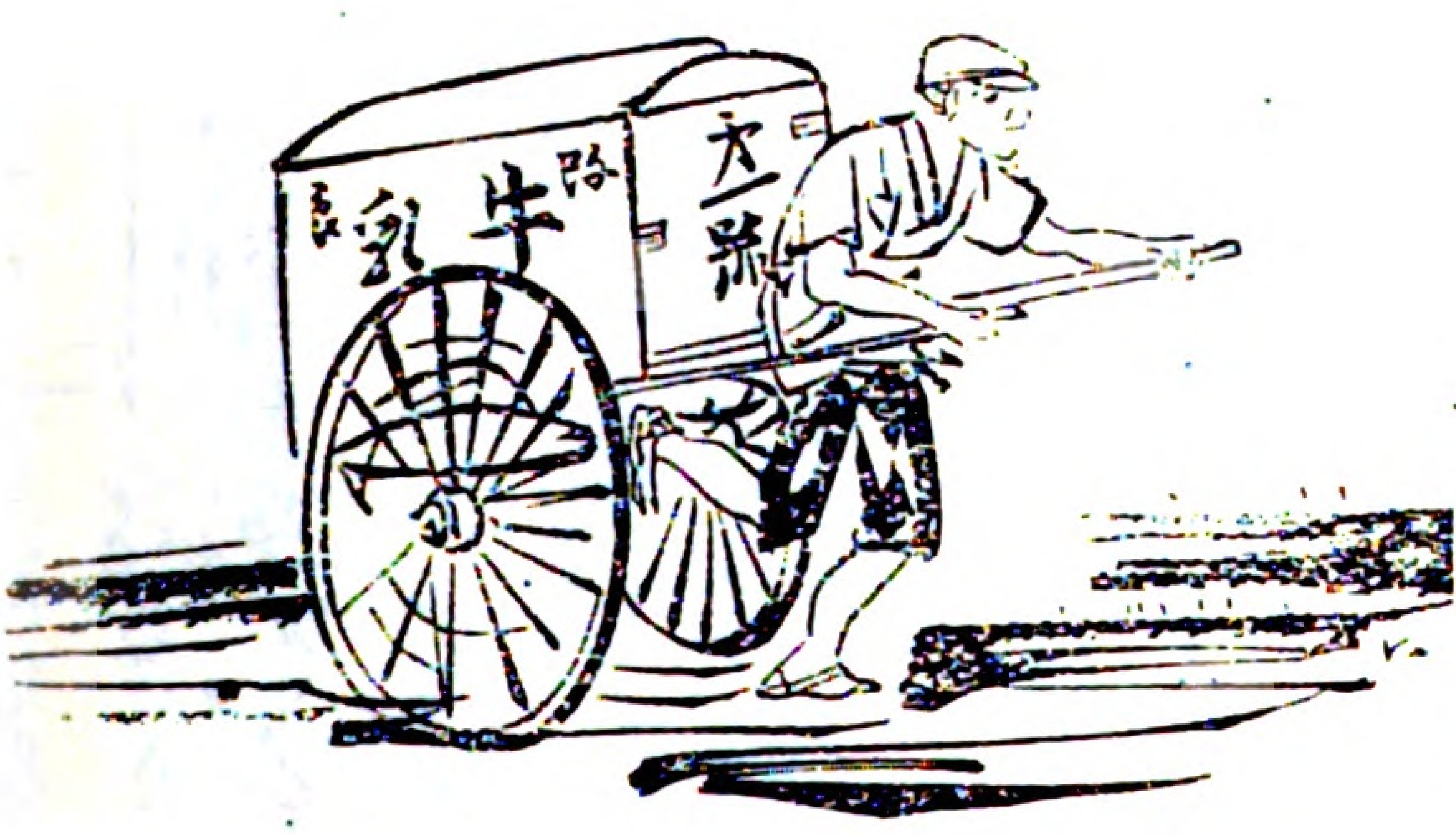
吉田松陰は、長州の毛利家の藩士にて、亞米利加の軍艦のはじめて我が國に來しとき、國禁を犯して、其の船に乘りこみ、彼の邦に渡航してその事情を探知せむと企てし人なり。今の伊藤博文、山縣有朋、品川彌二郎等の華族は、實にこの人の薫陶を受けしなり。この人の一生は至誠の二字を以て盡すべく、その至情の溢れて、遂に空しく小塚原の刑場の露と消えたりとい

へども、維新の大業の成りしは實にかくの如き壯士の與りて力ありといふべし。數年前、正四位を贈られ、松陰神社とて、東京の西世田ヶ谷に祀らる。今玆に其の妹に與へし一篇の消息文を載せん。

この間は御文下され、觀音樣の御せん米三日のうち精進にていたゞき候やうとの御事、御深切の御こゝろざし感じ入り申し候。精進潔齋などは、隨分心の堅まり候ものにて、宜しきことゝ存じ候につき、拙者も、二月廿五日より三月晦日まで、少々志のさふらへば、酒肴とも一向給はり申さず、その間、一度靈神さまの御祭のもの頂戴致し候ふばかりに御坐候。（二字は削るをよしとす。）まして、三日の精進は、さまでむつかしきことにもこれなく、御深切のことに候へば、相はたしたく存じ候へども、當所にては、わたりまへの精進の外に、また精進と申し候へば、連中又は番人ども、何故かと怪み尋ね候ふにつき、それをそれと相こたへること面倒と存じ候。（文章には、こたふることゝ書くべきなれど、こゝにては、談話のことばを、其のまゝに寫したるなり。極めて親しき人におくる書簡には男女とも、往々然ることあり。）八日はさいはひ御精日なれば、其の日一同にいたゞき申し候」。（いたゞき候ひぬなど改むべし。）（以上第一段。まづ、こまかやかに消息と觀音の洗米とを贈られしを謝す。これより、佛法につき

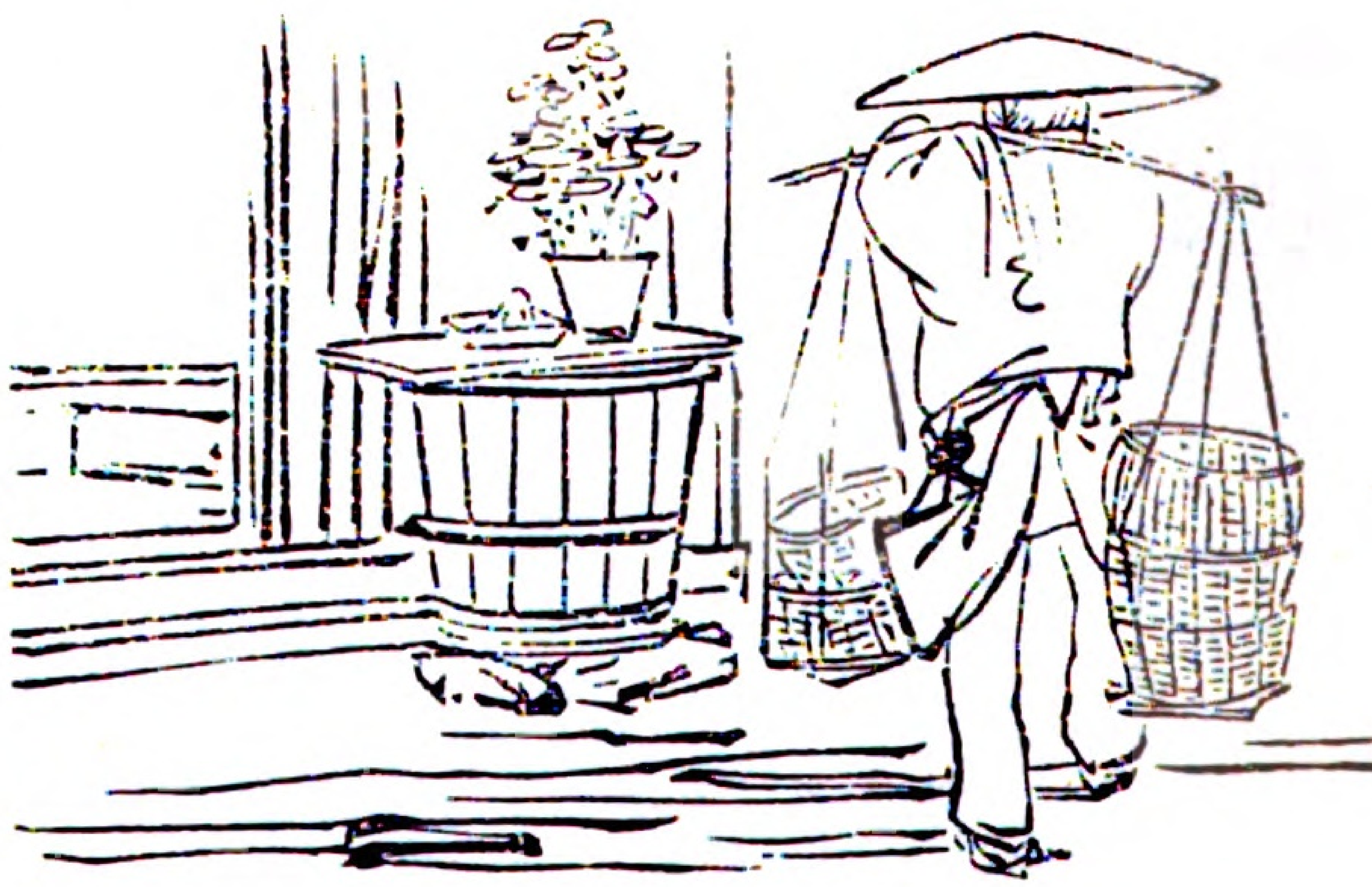

浮世十二時　午前四時

ての大議論を述べんとす。》
そも〳〵、觀音樣信仰せよとのことは、定めて禍をよける（これも談話の語なり。正しくはよくるとあるべし）ためにあるべく、（「べし、されど」などやうに改むべし。現今の書簡文には、大抵かやうに……べくと後に直に連續する形の助辭を使用すれど、これは誤謬なり。本文のは、又は、あるならんがなど改めてもよきなり。）是には大きに論あることに候へば、委細申し進ずべく候。《是より漸く議論に入る。》
拙者は、いまだ觀音經は讀み申さず候得ども、（「候へども」とあるべし）法華經第二十五の卷普門品と申す篇に悉く觀音力と申すと尊大に陳べてこれあり候。大意は、觀音を念じ候へば、繩目にかゝり候得共（「候はんとも」「候ふとも」、「候ひぬとも」など改むべきなり。）忽ちぶつ〳〵と繩が切れ、人屋（牢獄のこと）に捕はれ候へば、たちまち錠鑰がはづれ、首の座（斬首場）になほり候得ば（候へばとあるべし。）たちまち刀がちん〳〵に折れる（これも談話の語なり。）ものと申してあり候。是は、拙者江戸の人屋にて、此の經は幾度もくり返し讀みて見候得共（「見候ひしかども」、「見候ひしも」など改むべし。）始終この趣にて、それゆゑ、凡人はこれよりありがたいことはないと信仰するも無理はなく候。《まづ法華經の普門品につきて、佛法の、凡



午前五時

人に信仰せらるゝ所以を述ぶ。これ人をわが議論に屈伏せしむる慣用の手段。》さりながら佛の敎は奇妙な仕置にて、大乘小乘と二つに分ちて、小乘は下根（無敎育者といはんが如し）の人の敎、大乘は上樣（道理をわきまへたる人）の人の敎と定めこれあり候。小乘にて申し候得ば（「候はゞ」とあるべし。）觀音は右の經文の通りのものと心得たもの《を》信仰さするに御座候。（信仰せさするに候と改むべし）、これは人に信を起さする爲なり。信をおこさすることは、一心にありがたいことぢや《談話のことば》とのみ思ひ込み、餘念他慮なきことにて、一心不亂と申すもこの事なり。人は一心不亂になりさへすれば何事に臨み候うても、ちつとも頓着はなく、綱目も、人目も、首の座も、平氣になれ《なられの意》候ふから、世の中に、如何に難題苦患の候うても、それに怠轉して、不忠、不孝、無禮、無道等仕る氣遣はない。されど、初から、凡夫の一心不亂ぢやの、不怠轉ぢやのと申し聽かせても、さつぱり耳に入らぬものゆゑに、假に觀音樣を拵えて、人の信をおこさせる敎に御座候。是を方便《手だて》とも申し候。是において、法華經の都上のたとへこれあり、至極おもしろく候得ども（「候へども」とあるべし。）、事長ければ略し申し候。《以上小乘のあらましを說く。これより大乘に入る。》



午前六時

扨又、大乘と申し候ふときは、出世法と申すことが肝要に御座候。出世と申し候うても、立身出世など申すことには御座なく候。その初は釋迦が天竺王の若殿に候ふところ、若きときから感心のつよき人にて、老人を見れば、吾が身も往く先は老人になるかと悲く、死人を見ては、吾が身も往く先は死のふかと悲み、(死なうかと悲みと改むべし。)蟲けらの死んだの、草木の枯れたのまで悲を起し、是非に生老病死が此の世の習なれば、此の世を出でねばすまぬと志を立て、年二十五のとき位を棄てゝ山へ入り、右の生老病死を免れる修行をしに參られ候。是にも、色々ありがたき話あれど、事長ければ略す。



午前七時

さ候うて、三十出山とて、僅五年の間に、生老病死を免れることを悟り、生れもせねば、老ひもせず、病も死もせぬことを悟つて出て來て、それから、世の人を教化せられた。(以上釋迦の一世の略傳)是が出世の法じや。故に、出世せねば濟世が出來ぬと申すもこの事なり。濟世といふは、則、此の世の人を濟度(すくふ)することに御座候。」(以上第二段、佛法の教旨を略述せり。)

さて、その死なぬと申すは、近く申せば、釋迦の、孔子のと申す御方は、今日まで生きて御座る故、人が尊みもすれば、ありがたがりも、ぞそれ(「おそれ」とあるべし)

もする。果して死なぬではないか。【松蔭先生は、人の、一生何事もせずして、空しく、身の亡ぶると共に、事業も名も後に殘らぬことを深く歎かれしなり。生前に立派なる事業を成しおくときは其の人の精神は、その事業と共にいつまでも世に傳りて、即、其の人が永世生命あるに同じとこれ實に松蔭先生の大精神なりしなり。以下例證を擧げて詳にこれを論ず。】

孔子の教も、やはりこのとほりに候得共（候へどもと改むべし。）、事長ければ畧す。死なぬ人なれば（ならばと改むべし。）細目も。人屋も、首の座も、前に申す觀音經のとほりでは御坐らぬか。



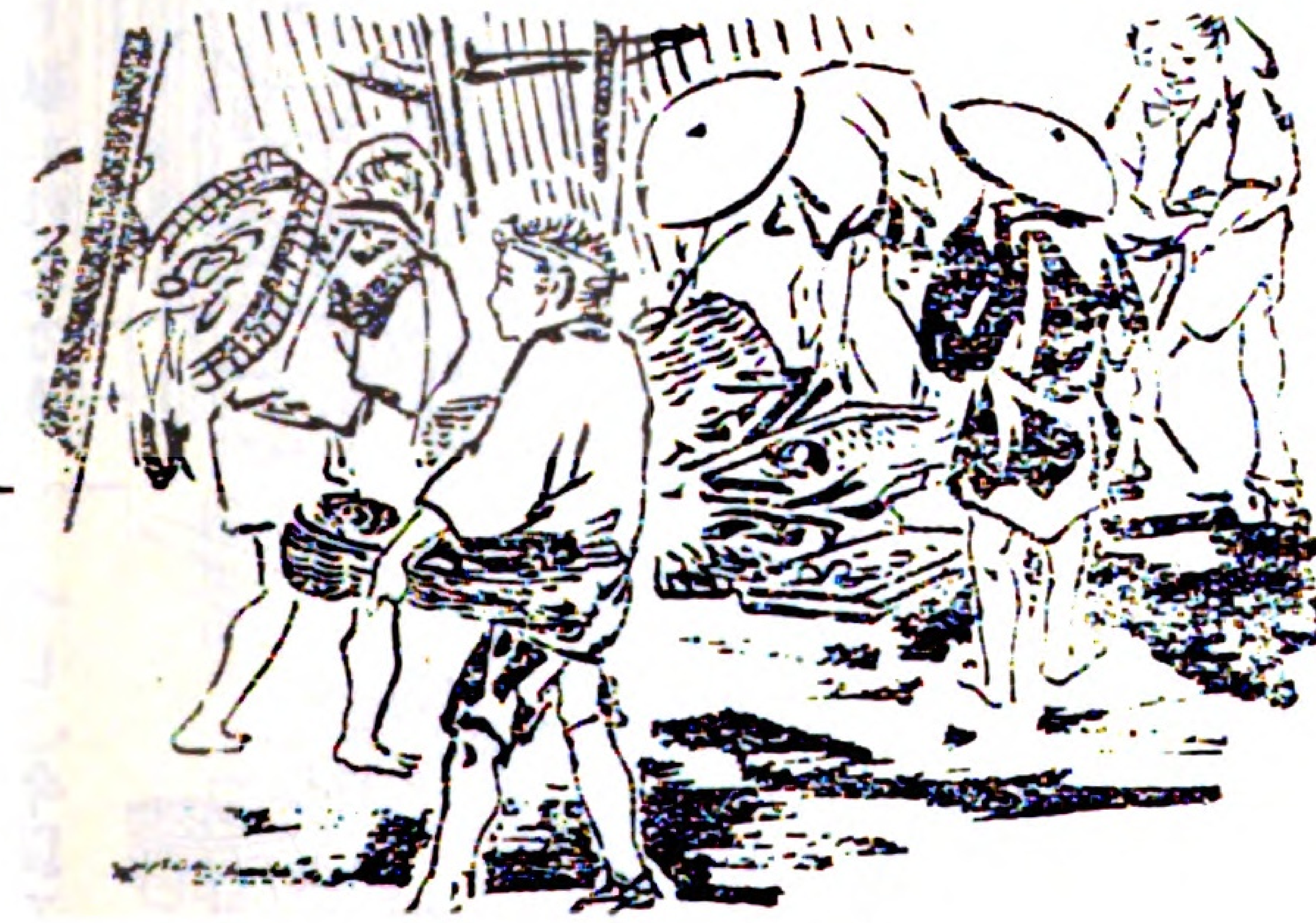
午前八時

楠正成公ぢやの、大石良雄ぢやと申す人には、刄ものに身を失はれ候得共、（「候ひつれど」など改むべし。）今以て生きてござるのは、刄のちん〳〵に折れた證據でござる。【刄は楠公や大石の身を亡しつれどその忠義の精神に至りては、今も凛然として生存せるなり。古人の義は泰山よりもおもく、生は鴻毛よりも輕しといひしは眞に味あることばといふべし。今の人は多くは生の貴きことのみを知りて義の更にこれより重きことを知らず。歎かはしからずや。】扨又禍福如レ纆といふことを御さとりがよろしく候。禍は福の種、福は禍の種に候。人間萬事塞翁馬（これは支那の古諺）に御坐候。（單に「候」と改めて

可なり。

此のわけは、物知りに問ふて（「問ひて」、又は「問うて」と改むべし。（古、塞といふ處の翁馬を買ひしに、その馬の爲に禍を祟りて悲みしが、その禍が又幸になりしかば、更に喜びたりといふ。この故事より、禍福の變轉するを塞翁の馬とはいひならはすなり。）

拙者なんぞ、人屋にて死候得者（「死に候はゞ」とあるべきなり。）禍のやうなものに候得共、（候へどもとあるべきなり）又一方には、學問も出來、己のため、後の世へも殘り、且、死なぬ人の仲間入も出來候得者、（「出來候はゞ」とあるべし。）福　此の上もないことにて、



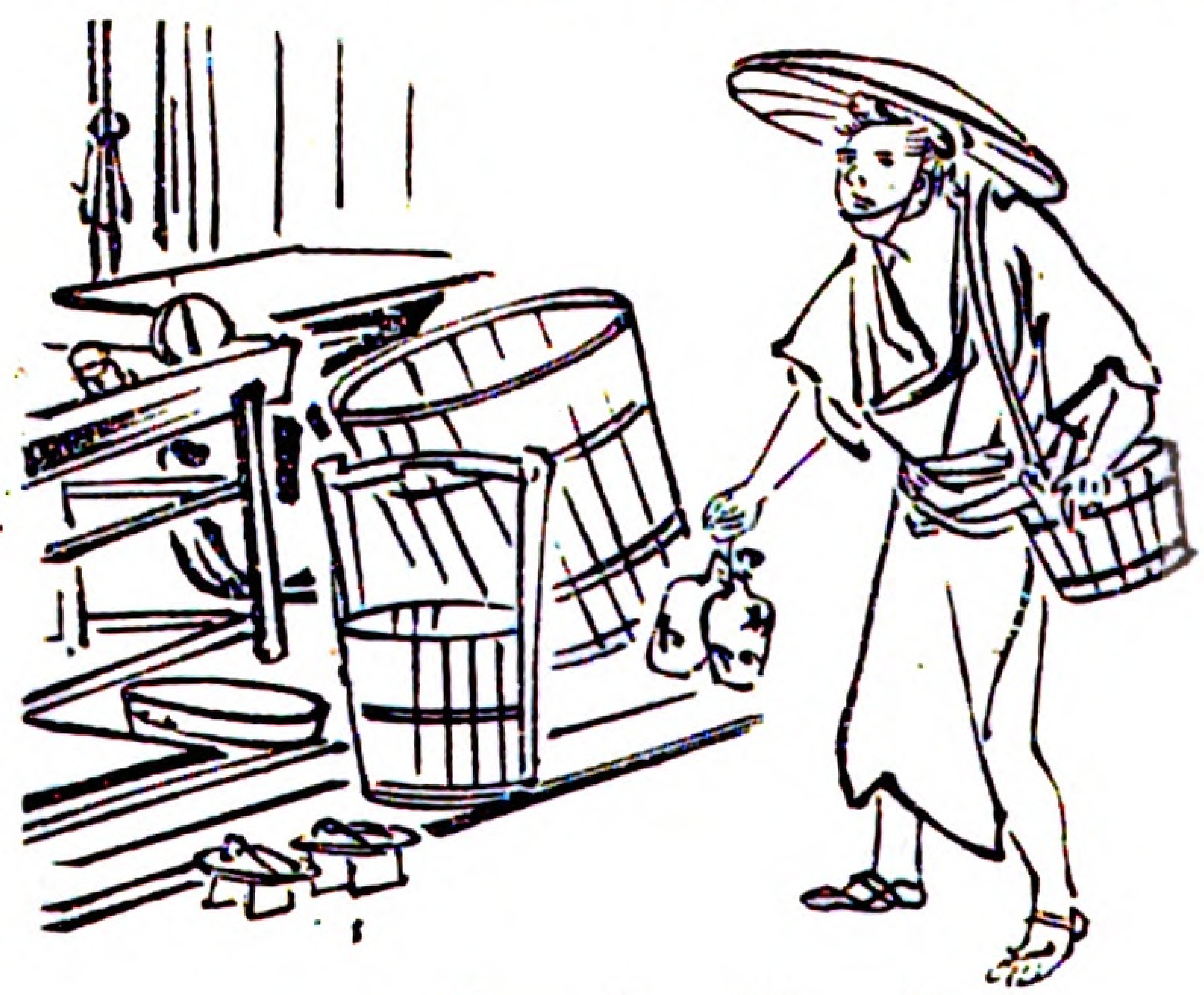
午前九時

人屋を出で候得者（「候はゞ」とあるべし。）禍の來やうやら知れ申さゞるは勿論、その禍の中に、又福も交り候得共、（「候へども」と）所詮、一生の間難儀さへすれば、先の福があることとなり。（松陰の生死に關しての持論は右の如きゆゑ、いづれの點より觀ても、死を悲み、禍を恐るゝはずなく、隨ひて、觀音樣を信ずる道理なしとなり。）

何の効驗もないことに、觀音へ賴んで福を求めることとは、本々無益に存じ候。（世の迷信者を喝破す）

尤、右のとほりに申し候へば、身勝手な申分、不孝な申分とも御存じがあらう。こゝに又論がある。（更に歩を進めて仔細に論ず。）易の道は、滿盈（十分の意）と申すこ

とを大きにきらふなり。某の七人兄弟中に、拙者は罪人、芳は夭死、敏は唖、否様の悪様なものなれど、又跡四人は可なりに世を過ぎられ、特に兄様、そもじ、小田村は、兩人づゝも子供があれば、不足は申されぬ。世の中の六七人も兄弟のある家を見くらべよ。是程にも參らぬ家は多いもの。近くは、そもじの家にても、高須様にても、兄弟内には否様の悪い人も随分あるもの。されば、父母兄弟のかはりに、拙者、芳、敏の三人が禍をかばうたと御思ひ侯得者、(「侯はゞ」)父母様の御心もすめる譯に御座らぬか。『易を引いて、物の十分に過ぐることの却りてよからぬを説き、夭死と唖との兄弟と、おのれの非常の位置にあることゝを以て易のいはゆる滿盈を損くものと論定して、しかも、その辭を厲しうして、其の情を弱めざらんとす。讀者、深く作者の心内をおもひやるべし。』且、『文章一轉して、更に杉家のことを説く。この一字きはめて、語勢急迫なり。』杉は、随分多福の家なれば、拙者の身上よりは、却りて杉が氣遣ひものぢやないか。拙者の身上は、前に申すとほり、つめが牢死。牢死しても、死なぬ仲間なれば、『前にいへる楠、大石などの類にて、後世まで決して死なぬ身なればとみづから信ずるところ、實に大丈夫のことばといふべし。人たるものは、實にこの自ら信ずる念なかるべからず。』後の世の福はずゐぶんなる



午前十時

が、杉は、今では、御父子も、御役にて何も不足のない中なれば、子供等がいつも此のやうなものと思ふて。（「思ひて」とか「思うて」とあるべし。）昔、山宅にて、父様母様の晝夜御苦勞なされたことを話して聽かせても、眞とおもはぬほどなれば、この先、五十年七十年のことを、とくと手を組んで案じて見やれ。（この邊の文章は、すべて言葉のまゝなり。却りて作者の眞情をありのまゝに見る。よく〱注意して見るべし。（氣づかひなものではないか。去年も、端午の客の多いのに、人はめでたい〱と嬉貌すれど、拙者は、先の先が氣遣はれてたまらんから、始終稽古場へ（にと改むべし。）かゝんで、人の知らぬ



午前十一時

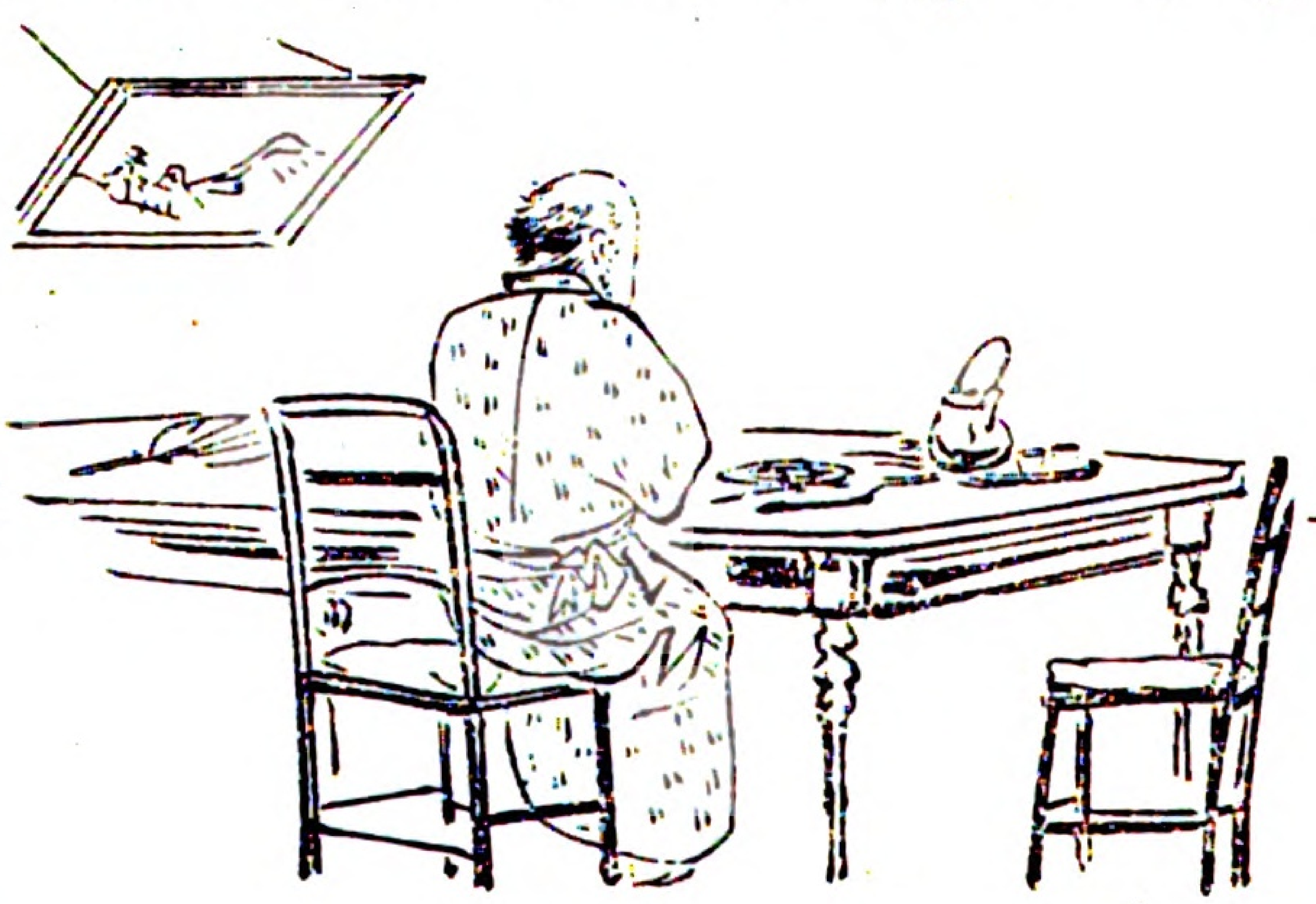
處にては、ひとり落涙したほどのことであつた。（松蔭は人の一生つまらなく終ることを恐れしことかくの如し。人のめでたしといふことを、さは思はで、落涙すといふ。その尋常一樣の考を拔け出でしことこれにても知らる。人は眞にかくありたきものなり。）もしや萬一、小太郎でも、父祖に似ぬやうなことがあつたら、杉の家も危い。父母樣の御苦勞を知つて居るもの、兄弟にても、そもじまでじや。小田村でさへ山宅のことはよく覺へ（えと改むべし）まい。まして、久坂なんどは倘以てのこと。されば、拙者の氣遣に觀音樣を念ずるよりは、兄弟、をひ、（「おひ」）めい（「めひ」）の間へ、樂が苦の種、福は禍の本と

申すことをとくと申してきかせる方が肝要じや。」（以上第三段。死のあまり氣遣ふに足らずしていつまでも死なぬ工夫が肝要なりといふことを論ず。）そして、又一つ、拙者不幸ながら孝に當ることがある。兄弟内に一人でも、否様の悪ひ（「悪い」と改むべし。）人があると、跡の兄弟、自然と心が和いで、孝行でもするやうになる。兄弟もむつましくなるものぢや。それで、是から、拙者は、兄弟の代に、此の世の禍を受け合ひながら、兄弟中は、拙者のかはりに、父母へ孝行してくれるがよい。さやうあれば（「あらば」とあるべし）縮る所、兄弟中も皆よくなり、はては父母様の御仕合、又子供が見習ひ候得ば、（「候はゞ」とあるべし。）子孫のため是程めでたい事はないではないか。能々御勘辨にて、小田村、久坂なんどへも（「にも」とあるべし）この文を見せ、佛法信仰はよいことぢやが、佛法に迷はぬやうに、心學本（『心學道話』、『鳩翁道話』などいろ〱の書籍あり。これは身を修め家を齊ふることを、きはめて平易に、卑近なる喩などをとりて論じたるものなり。讀みて大きに益になるものなり。）なりと、をり〱御見候へかし。

心學本に、

長閑さよ、願なき身の神詣。

神願ふよりは、身で行ふがよろしく候。」（以上第四段。おのれの身をほろぼして一族の禍に代るといふことを説き、心學本を觀て、神佛

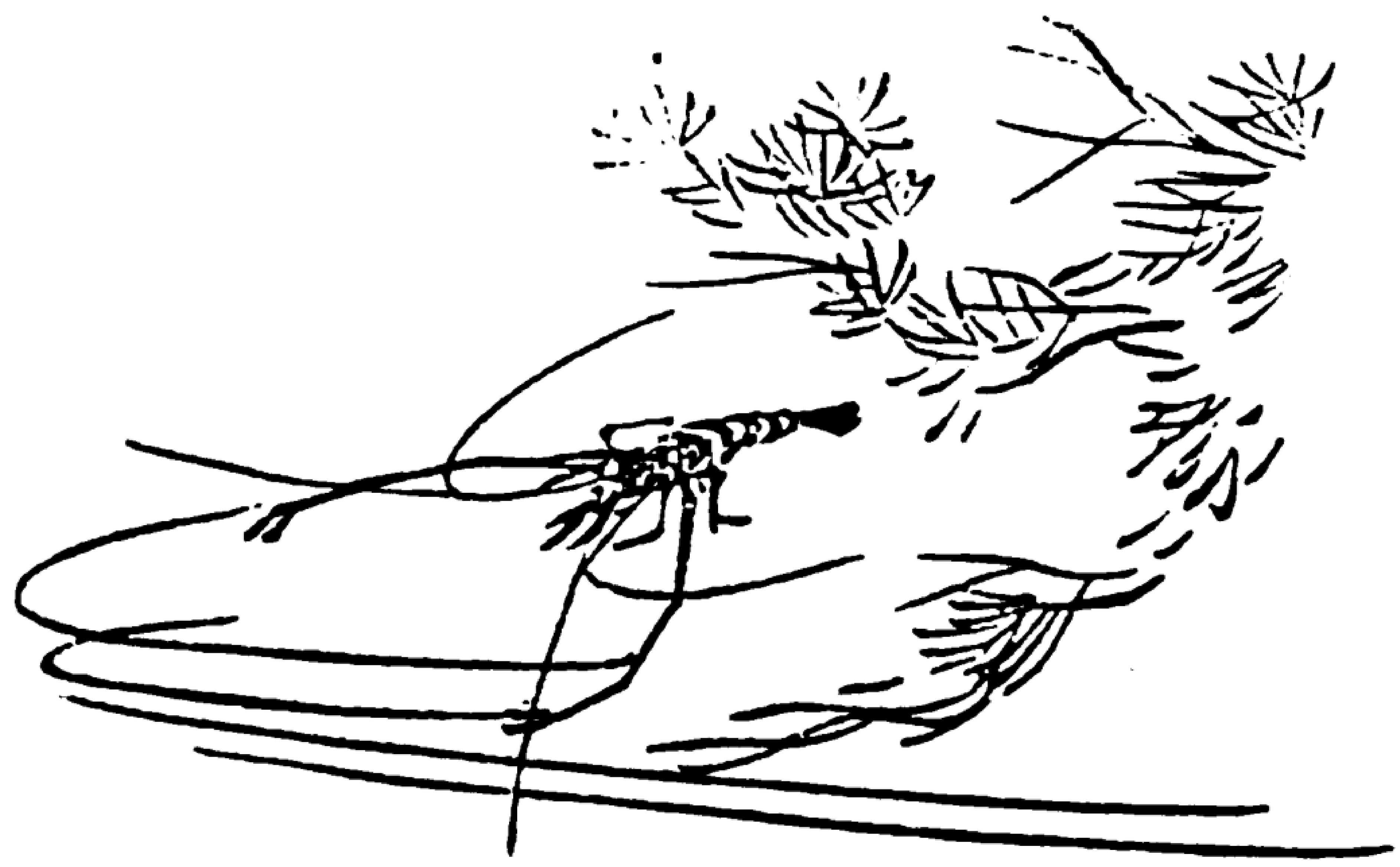


正午

に祈念するよりは、自身に行ふが肝要なりといふことを勸む。』

安政六年四月十三日

この書は、松陰が、野山といふ處の獄屋より、妹千代子におくりしにて、千代子が、兄の身の上を氣づかひて、觀音の洗米をすゝめたるにこたへしものなり。妹の優しき情のほども知るべく、松陰が、妹の迷信を諭すことばの、理の當然にして、義のはげしきうちにも、誠に友情の掬すべきものあるを觀る。神ほとけを信仰することは、決してあしきことにはあらねど、まづ、おのれに、爲べきことだけを爲おきて、しかして後に、禱るにあらずば、神も佛も、などてこれをうくべき。おのれを盡さずし



海老はねて藻の花動く岩の間

て直に神佛に依頼すること、これ實に今も一般に世俗に行はるゝことなり。世間の家庭を見るに、身のほどもさまで卑しからずして、且、敎育もあまりゆるがせにせられざる家にして、おもひの外に迷信に陷れるがあるは、余のしばしばみる所なり。かくの如きは、衣服をかさねずして、身のあたゝかならむを欲し、飲料を廢して渇を癒さんとするにも比ぶべし。迷信といふことは、實にながく家庭に害毒をのこすものなれば、よくよく心を用ゐ氣を勵まして、その弊風を一掃すべし。

松蔭のこの文、理と情と兼ねつくして遺憾なし。殊に釋迦の孔子のと申す御方には、今日まで生きて御坐

る故、人が尊みうすれば、ありがたがりも、おそれもする。」果して死なぬではないか、死なぬ人なれば、細目も入屋も、首の坐も前に申す觀音經のとほりではござらぬか。楠正成公じやの大石良雄じやのと申す人には、刄ものに身を失はれ候ひつれど今以て生きてござるのは刀のちん〳〵に折れる證據でござる……

の一段、よく〳〵味ひて、子女を敎育するに、たゞ愛に溺れて、その肉體を大切にするばかりなることを戒むべし。人はすべて不朽なる業を成し出でずば、生命は六十年か八十年にて、まことに、短きものなれば、かへす〳〵も、天下後世にも傳はらんほどの偉業を成し遂げしむるやう、父母なるものは訓育を加ふべきなり。これ實に家庭の大精神なり。



朝顔や根岸は水のよいところ

◎蜻蛉の話

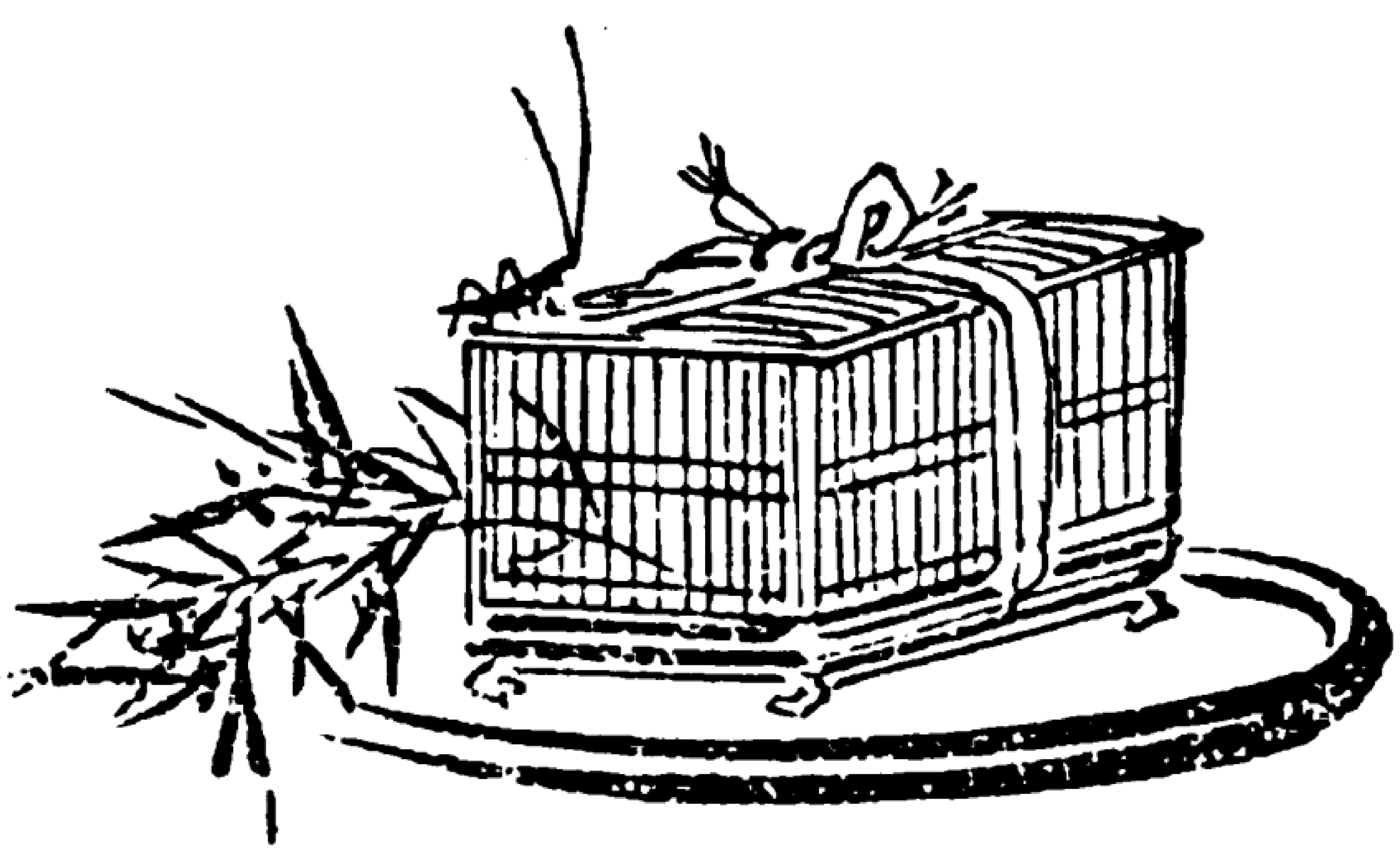
烟溪生

夏から秋にかけて種々の蜻蛉が出てきて野原又は道端を飛び廻はつて居る故、兒童は面白そうに之を捕へんとて暑き日中も構はず追ひ歩るいて樂にして居る、

扨此の蜻蛉を捕へた時は翅を抜取つたり首を切つたりしないで蜻蛉といふものは如何なるものであるかと試驗し他日蝶とか峰とかを捕へた時に比較べて見なば大なる利益あるべし

人間も生物である蜻蛉も同じく生物であるが、人には骨があつて歩る時とか手足を動かす時には骨に附着て

居る筋肉が伸び縮みして働らく、けれども蜻蛉には骨がなき故外の皮が硬く筋肉は皮に着いて骨の代りを勉める即ち人間の如き有脊動物は硬き物(骨)は筋肉の中にあるも蜻蛉に至りては硬き物の方が外の方にあつて丸で反對である蜻蛉の體を見るに頭と胸と腹の三つに別れて居り、蜘蛛、蝦などは頭と胸と一つにて躰は頭胸部と腹部の二つに別る蜻蛉の頭は大きなものにて畢竟口を動かす所の筋肉を多く含む故なり、口は上顋と下顋とありて横に動かして物を含む、眼は數多の六角鏡互に寄合ひて鏡毎に一の神經絲を具ふ、所謂複眼と呼ぶ所のものなり觸鬚は細絲の様なるものにて複眼の側より生へ感觸の用をなす、



ま夜中の一ツ屋さびしきりぎりす

胸部には脚と翅とを有し脚は三對即ち蝶蜂の如く六脚(昆虫類は總て六脚なり)なり蜘蛛は四脚蝦は五脚なり翅は二對即ち四翅ありて胸の腹に近き脊の方に生へ前翅後翅其大さ同じく膜質を爲して細き翅脈の網の如くに見ゆ腹部は細長き環節より成り側面に孔ありて呼吸を司どれり、

雌の産卵する時は腹部を水面に浸して産み卵子は仲夏の頃孵化して幼蟲となる之れ水蠆と稱するものなり、胸には六脚ありて九ケ月十ケ月程たつ時は水中より木片又は乾きたる地に攀ち上り背部裂開して蜻蛉現はれ出づるなり斯かれば幼蟲より蛹となる區分明かならず、小虫を以て食とす故に蜻蛉とは斯様いふものであるといふことが出來

る、蝶蛾と同じ様の昆蟲類の一にして體は頭と胸と腹の三つの部分より成立ち骨なき故に外の皮硬たく内部の保護をなし頭部には一對の複眼と一對の觸鬚と口器を備へ胸部には三對の肢（即六脚）と二對の翅（四枚の翅）あり腹部には側面に數對の氣孔ありて呼吸の用をなし發生は卵より幼蟲蛹成蟲と變化す尤も幼蟲と蛹の區別分明なれば不完全變躰なり

蜻蛉の種類には種々あり又た所に依りて云ひ方も異ふが今其重なる名稱を掲ぐれば馬大頭、紺蜻、車ヤンマ、銀ヤンマ、箱根ヤンマ、虎ヤンマ、麥藁蜻蛉、鹽拆蜻蛉、赤卒、熨斗蜻蛉、羽黒蜻蛉などあり今少しく此等の蜻蛉を捕ふる法を述べんに通常行はるゝ所のものは馬の毛（或は女の髮の毛を用ゆ）の兩端に小さな石を紙片に包みて結び付けたるを空中に投げ上ぐれば蜻蛉は之を小虫と誤り餌にしてくれんと近付く一刹那、糸は體に搦まり下に落ちて捕へらる倘竹竿の先にモチを付けて捕ふる法あるが地上木の枝などに靜かに止まり居るものを捕へるには一間程離れたる手前より右手に一片の白布を以て蜻蛉の後方より右手を大きく空間に輪を作りて振廻はし段々蜻蛉に近よるにつれて輪を小くし、手早く振廻はすと蜻蛉は眩暈をして容易く捕へ得べし

ヤンマなどの野原に一定の場所を舞廻はつて居るを捕ふるには雌を囮に用ゆるなり之れは蜻蛉の尾交期を利用したるものにて雌の胸部を糸にて縛り程好き長にして他の一端を竹片の端に結びて雄の飛廻はる所に立つて竹片を徐々と振廻はす時は雄は雌を求めて來り容易く捕ふことを得るなり若し又た雌のなき時は雄の腹部にやぶからし葉を揉みて付くべし

斯くして捕へたる蜻蛉は各部の研査を終りたれば直樣放ち遣り給ふべし

女大學に就て

桃園子

益軒が女子敎育に熱心なりし事は今更いふ迄もなき事にして殊に其女大學は彼が意見の宏博にして且周密なるを窺ふに足るものとす

此書德川時代より明治の初年頃迄は貴賤上下の差別なく女子の摸範として殆んど全國至る所に用ゐられたり

蓋し書中女子たるものが良妻賢母たらむとするに常に服膺すべき要項のみを列擧して殘す所なければなり然るに泰西の文物輸入されてより女子の權を說くと盛に女大學は一概に卑屈の敎科書の如くに排斥せられ殆んど是を手にするものなきに至りたるは過ぎたるはなほ及ばざるが如しといふべきか遺憾の至りなり左に其摘要を抄錄せむに

一家庭に於ける女子敎育の弊を述べて是を戒む

一女は形よりも心の勝れたるをよしとす

一其心正しき女は和らぎ從ひ貞心に情深く靜なり惡しき女は心さわがしく、目つきあしく、見にくき顏つきにて人を怒り又言葉使ひあしく其云ふ事柄あしく人より先に口を出し人の善を見ては恨み憎み我を誇り人を誹る

一女子は一度嫁して復歸らず若し夫の家の次第に貧になり行くことありとも己の仕合惡きと心得へしたとへ再び富貴の家に嫁すとも女の道に違ひて大なる恥なり

一舅姑は我親よりも重んじて敬ひ事へたとひ不親切なる取扱を受くるとも怒り恨む事なく孝を盡し誠を以て事ふべし

一女は別に主君なし即ち夫を以て天とし敬ひ事へてかへすがへすも夫に逆ひ天の罰を受くべからず

一小舅小姑を敬愛し娌に親み嫂を敬すべし

一嫉妬の念あるべからず夫不義過あらば靜に機を見て

諫むべし

一口を謹まざれば家の内治まらず

一萬事に身を謹み終日家事を怠らず淫れたる事を見聽かず人の集る所へは四十歳より内は餘りに行くへからず

一巫覡などに迷ひ耽るべからず

一身の分限を知て家を治むべし

一妻の心掛によりて家をも破るべし

一身と衣服とを清潔にし華美に習はす身に應じたる物を用ふべし

一我親の方を厚くし舅姑の方を薄くすべからず又私に餽し又夫の許さゞるには何方へも行くべからず

一女は夫の家を繼ぐものなれば我親よりも舅姑を大切にして仕へ我親の家へ行く事は稀なるべし又たとひ我親の家富貴なりとも決して驕りて讃め語るべからず

一多くの召使を使ふものは己先づ辛勞を忍ぶべし舅姑夫に關する事は總て我負擔なれば常に内にのみ注意して猥りに外に出づるを好むべからず

一下女を使ふには賢明にして寛仁ならざれば僅に一賤女の爲に家を亂る事あるべし

一婦に五つの疾あり不順、嫉妬、憎惡、憤怒、無智、なり

と又終りに臨み人よく百萬錢を出して女子を嫁せしむる事を知て十萬錢を出して子を敎ゆる事を知らすとの古語を引て人の親たるもを誡め敎ゆる所甚切なり

要するに是れ益軒敎育法の要綱なれは 希くは未來の良妻賢母たらむと欲するものは常に此趣旨を參考して以て此書に勝りたる文明世界に適當なる活きたる摸範を造らさるへからず

烟草談

無名氏

莨は果して有害なりや

莨の有毒なる事は世既に定論あれば吾人今更之を喋々するの要なけれども近頃成人青年の間に喫煙の益々烈しく行はるゝのみならず、小學校生徒は申すに及ばず幼稚園に通ふ兒童、甚だしきは未だ全く母の膝を放れもせぬ小兒に至るまで、卷莨を弄び且つは之を燻らすを日々目撃し斯くては未來の日本國民の躰格精神の上に少からぬ影響を及ぼすべしと憂慮に堪へず、老婆心のあまり左に根據ある説のみを撰みて擧けたれば、乞ふ讀者諸君よ注意して一讀を煩はし給へ

莨の由來

今は文野おしなべて各國の人々皆喫煙するの風あれど其初めは一の野蠻國より文明國に傳來せしものなり即ち西暦千四百九十二年彼のコロンブスが大陸を發見して間もなくウエストインデースの人がスペイン人に傳へしものなり、然れども其當時は歐洲にて喫煙せし者はまことに僅々として之が一般の風習となりしは大略百年も經し後なりといふ。

植物學上及び化學上の莨

莨には其種類七八ありて大概温暖なる地方に産するも、彼の普通のベルヂニヤ種の莨の如きは、熱帶地方にも能く茂生するなり、莨を化學上分拆すれば、鹽分酸分糊其他二種の有毒元素を含むこと明瞭なり即ち一はニコチナと稱するアルカリー性の無色の液にして、燃ゆるが如き辛き味を有し、最も濃厚なる青酸に混すれば作用を起すの力ある有毒物の甚しきものなり、又一はニコタニンと稱するアルカリー性とは全く異なる油質の有毒元素にして身躰の生活機關を害するの力ありと云ふ、而して久しく用ひられたる煙管内には此油滓積し居るを以て是を用ゆるは卷莨を燻らすよりも

何は有害なり、然るを世の喫煙者は古き煙管を愛玩し、此有毒なる油に燻りて光澤を生ずるほど珍重するは實に恐の至りなり。

或る學術雜誌の確言する所によれば「ニコチナ」の至て有毒なることは一本の巻莨に含む「ニコチナ」の分量を取り他物と混ぜずして之をのみ服せば直ちに死に至ると云ふ

莨の生理上に及ぼす害

或る名醫莨が生理上に及ぼす結果を觀察して曰く莨を少量喫すれば咽喉内に熱氣を感ずるのみなれど、之を多量用ゆるときは嘔氣を催し吐瀉を起し、又胃腑内に最も不快なる感を覺ゆ又稀には止痛藥として功を奏し睡眠を促すことあり。

莨中毒の結果として最も著るしき顯象は、人物事に倦厭懶惰にして憂鬱となり、筋肉は弛み身躰は慄へ視力は弱り思考力は錯亂し、脈搏は微弱となりて、時々失神するの傾向あり、皮膚は寒冷にして粘り氣を生じ、甚しきは痙攣を起し、中風性を發し、身躰不自由となりて遂に死に至ることあり。

如何なる物質にしても人躰内に入るや、其性質に隨ひて或る特別の機關に作用を起すものにして、例へば白鉛は常に腕首の筋肉を害するが故に、白鉛製造者又は常に是を用ゆる畫工が腕首の働を失ふこと屢々あり、又水銀は唾腺を毒し沃素は淋巴管を損し而して莨中に含む油は心臓の神經を害し心臓の力を弱め動悸を起して脳の動脈管に必要なる一定の分量の血液を輸送すること能はざらしむるを以て、眩暈を起す、故に過度に喫煙する人の重き心臓病に罹りて、遂に治すべからざるに至るは往々見る所なり。

以上述べし莨の害は皆多くの醫學の大家の確言する説なるが、されば何故世には多年喫煙を嗜むも毫もさる中毒の徴候なき人の多くありやと疑問を起す人もある

べし、然れども假令一時に其害の目前に現はれ來らざればとて無害なりとは斷定し難し又凡て有毒物は最初多量に喫するときは直ちに死に至るも、少量づゝ漸次に用ゆれば敢て其害を祟らざるが如く見ゆるは事實なり。而して其理は生理學上吾人が研究すべき一大問題なり、彼の世人の熟知する礜石或はモルヒ子の如きも初め少量を服し、次第に其分量を增せば毫も其害の現はるゝことなし、又鴉片の如きも初めて喫せば痳痺を起して死に至るべき分量も習慣として、永く是を用ひし人には如何なる結果も生ずるとなし。

以上述べ來りたる如く莨並に他の有毒物は身躰之に慣るれば直接に其害を見ずと雖、讀者よこの一事を記臆し給へ、即ち凡て動物の生命を保持するに反對の性質を有する物質を絶へず身躰內に入るれば其機關の動作を攪亂し次第々々に其能力を虛弱ならしむるものなるとを。

（未完）

家庭の實業

繃帶ほどし

其村

醫師が負傷者を療治せん時、其傷口を蓋ふに用ふる、彼の繃帶に清き晒しをほどして製せる、誠とに清く且つ美しく、然かも亦甚だ和らかき處のもの、蓋し些さかのものだも感ずる、傷口などを押さゆるには、實に此上やあらざるべし、此ことのために是れを用ふる、抑も何國に於いて何の時に、誰か初めて企てしにやら、さらんことはいふの要なし、唯その作り出さるゝ模樣と、其順序とのみについていはんに、是も亦先々に言ひ來りたる、卷煙草まき、燐寸の箱張りなどゝ同樣所謂內職の一つにして留守まもる人々の手に、火鉢のあたりに於いてなさる、其有樣は左の如し。

病院又は大ひなる醫師の許へ、直接これ等のものを賣り込む、漸々大ひなる商人の、豫ねて其品を受け來り

たる、たとひ何程にもあれ、其量だけの晒木綿、集め來りたるものを小さく切り、一反を一束として何個もたばね、これを下受の人、即ち内職の元締に渡すを、元締の人其彼處に持ち運んで、或は十個、又は二十束と、其先々の様を計りて、置いて行くことは巻煙草などを置いて行く順序に交はらず、請けたる人々の、其小さなる切れを一々にホゴシてこれを一束つゝ一つに纒とめて、集めて下受人の來るを待つ。

唯それ、木綿の切れをホゴス、何の譯もなきことにして、誰にも出來るものなれども、若き人手荒き仕事などなせしものには、兎角指先きの荒らくして、取扱ひ誠とに思ふまゝならず、頗るなし難く且つハカどらず、然しで尤も其仕事に適するものは、老人又は小兒、殊とに十二三位なる女の子に適すといふ。

さればにや、此内職餘まり多く目にふれず、唯々芝區邊の小さき寺、又は番町などの小さき家に、坊が妻女、或は小官吏が老母など、割合に奥深き處におりて、なされつゝあることを僅かに見るのみ、餘まり普及の内職とはいふべきならず、されども、其手奇麗にして、萬づの躰裁もよく、實に數多き内職の中、恐らくは、最第一等、最上に位すべきものなり。

次ぎに其賃錢のこと、これは誠とに安くして、先きにいひし、燐寸の箱張りにも、凡そ二割方ばかり下れる由にて、一日の得分、餘程勉めたるものにても、僅かに六錢位多くして七錢乃至に九錢までに到るとぞいふ。

是いふまでもなく、其取扱の美しきため、おのづから然るべきならんも、又他の一つは、其の内職人なるものが、割合に上品なる部分多ほく、他のもの、如く、其得分の多少を爭はざるに依つてなるべし。

もしも世にい美しきことのみを欲して、賃錢などの上に、餘まりおもきをおかざる人は、實にこの内職をな

すをよしとす、病院の附近、又は大ひなる醫師などの家について、聞かば大抵、此内職の出先は知るべし。

鼻緒の前壺

これは又、繃帶のホゴシに對照して、尤も取扱のムサクロシきもの、恐らくは、内職中の最低下等に位するもの、多ほく裏店の小さき家々、半身裸體の男女老少によつて共になさる。

麻のしなやかに打なされたるものを、短かく其丈けに切られたるもの、凡そ百足分、二百足分、乃至は五百足分と、樣々の束にして持運ばるゝを、其家々の人數によつて各々其多少に應じて請取り、これを其緖はれたる鼻緒につけて、充分のよりホゴシざる樣に附けるなり。

充分の力、手先指頭にあるにあらざれば、決して甘くは行くべきならず、故にこれには、成べく下等なる人々、成べく荒仕事などなせし人々を以て適當となし、先きに掲げたる繃帶ホゴシなどによろしき人は、夢々叶ふべくもあらず、よしや一日乃至二日位、堪えてなし能ふことのありとても、恐らくは直ちに手の掌を破り指を損じ、大ひなる創なんどを負ふに終はらん、然して其仕上げたる處のものは、恐らく用に立たざるべきなり。

さればこそ、其職元の人々も、成べくは、下層荒々しき人の許にのみこれを送りて、其仕上を仰ぐ樣に見ゆ、そも亦當然のことゝ思はる。

賃錢は、割合によく、一日に十錢以上は得らるゝやにいふ。

いはゞこれ、小さく短かなる苧縄をナフまでのことにしあれば、これぞと別段の熟練を要することもなく、唯々前にいひし如く、力さへあれば充分にして、其日それを初めし時より、人並の賃錢だけを得ること出來

る、頗る簡易なることなり。
次に餘得などいふこと、これが上には少しもあらず
と、いひなせること實に甚なり。

社會

流行片々

化粧品

佳好の品を撰まば日本製には再製引伸ばしの摸造多く英米獨も格別に思はしき品なくて獨り佛蘭西製のみ交際社會に橫行濶歩の姿、中にも巴里のピノー、ロージヤカレー、ピーヴエル、ジエフレー、ピヲレー、ルピン等各會社の製品賣行き能く、匂ひに就て好めば峻烈なるはバイオレット（當年新輸入）、オトロップ、オポヽナキス、ジヤスミン、エスパング、チヤプレー等、溫厚にて薫りの長きはホワイトローズ、ムケツド、ヤラング、リラー、イリス等にて特に峻烈の匂ひと薫りの長きとの二特色を併有するはバイオレット、オトロップの二種にて代價は大凡豆香水にて十五錢より三四十錢迄、普通小瓶にて五六十錢より貳參圓を並の上等として其以上は四圓もあり八九十圓もあるべし（銀座つやぶきん佐々木玄兵衛氏の調に據る）

其他化粧水にオイデルミンあり、（壹箱三個入七十五錢）すき油にメラゼリン（柳絲香）あり、（壹箱三個入壹圓五十錢）白粉春の雪（壹箱三個入二圓十錢）水油花かつら（壹箱三個入壹圓二十錢）びん附の玉椿（壹本二十錢）うがひ水の志のゝめ（壹箱三個入九十錢）の如き淑女社會の需要に應じて好評あるものゝ中なるべし（京橋出雲町資生堂調）

蝙蝠傘

蝙蝠傘は前年度の割合よりすれば二三割方は騰貴して然るべき筈なれども重に本年使用する材料は昨年冬期

に製造したるものなるを以て思ひの外高直ならず昨年よりざつと一割高なるべし尤も品に依りて高下あれども先づ平均一割高にして嶄新なる品は割合に高く流行外れの品は案外に安直なりと

●●●●●婦人持上等品　昨年來傘骨及び柄は佛國パリー製のものを用ひ東京にて張上げたるもの貴婦人社會に持囃されたるが其柄はゴム曲りにて布は和製西陣純子に花模樣を織出したる黒紺、赤紺、鰕茶、紫等を張りたるもの多く中にも黒紺最も賣行きよく代價は一本四圓より七八圓位なり

●●●●●同上舶來品　即ち全く佛國製にしてパリーの流行品なりとかにて去月中我國に輸入せしものにて柄は自然木に七寶燒寶石入或は自然木にゴムを以て人面及び牛馬犬等の形を現はしたるものを用ひ紺、黒、鰕茶、色甲斐絹（布地に木目を織出したるもの）を張り骨は金鍍、鐵等にて骨の先きに金銀鍍をなし又は象牙、角等にて先きを造りしもの直段は先づ六圓より最上十五六圓迄にして賣行き最も好きは十圓前後の品なりと

●●●●●同上和製品　柄は大概曲り及ゴムにて、人面或は動植物等を現はせるもの或は塗七寶（即ち擬七寶）等にして布の色は矢張り黒、紺、鰕茶、紫、紺上、赤、鳩羽色等、骨は普通製にて骨の先きは何れも白き角を附け（一時は金を附着せしもの流行せしも兩三年前より廢れたり）直段は一本二圓前後より四圓迄にして賣行きの好きは二圓前後の品なりと以上記載せし婦人持の形狀は深張り、中張りの二種なるが舶來品は多くは中張のみなり其年齡により形狀及び色合の選別異なりと知るべし

●●●●●婦人持並製　は六七十錢より一圓前後にして其種類多ければ何れを其れと記し難し

●●●●●男持上等品　は佛國製にして柄は自然木の變り物骨は並製と同樣黒なるも品質は至て精良にして開閉極めて

輕便にして捲けば細くして洋杖の代用となる位の物一本の直段五六圓より十二三圓位にして就中最も輕便なるは不用の節は三ッに折りたゝみ得る物にて是れは最近の輸入なり

男持中等品　は柄は矢張り自然木或はゴム製にして布は綾甲斐絹色は黒、鰕茶、御納戸等にして黒最も賣行き好く直段は一圓七八十錢より四圓位迄にして

男持下等品　は柄は取手のみ木又はゴム、角、等にして多くは鐵棒を用ゐ布は繻子なり其代價は五六十錢より一圓五十錢位にして賣行きの最も多きは洋傘中第一に位せり

女見持　柄はゴム、自然木、曲りゴム、七寶等にして布は紋織、羽二重、綾甲斐絹、繻子、綿純子等にて骨は普通にして先きに角又は金を附けしもの上等は三圓五十錢、中等は二圓、下等一圓二三十錢にして紋織繻子は七八十錢なりといふ

盆提灯

提灯に就て云はゞ昔しの形なる白張りに先祖代々など記せし物は今は墓地より外には見受けず、又た白地に家々の定紋のみを少く現はしたるも今は廢れて風鈴の淸き音に音信られ軒の忍ぶ草に凉しき風を惠まれて端近う吊し出されし岐阜提灯こそ盆ばかりかは夏の夜の粧飾品として横行濶歩の姿た大きさは尺より尺五寸まで、地紙にも上中下より二重張もあり絹張りもあり、繪は例の所柄とて鵜飼の圖を始めとして四季の草花、水月、花鳥（有職めきたる）など、彩色にも幾色かあれど是は凉しきを詮とすれば淺黄勝の淡彩こそ望ましく、口輪金物つき絹總を附けて最下等二十五錢より普通の最上等七圓五十錢までよと、賣行のよきは一圓内外の品なるよし、是も物價騰貴につれて元方は三割餘の騰貴の由なれども、根が贅澤なる品の事とて其向きの商人は高くて賣れぬよりも安くして賣り放つ主義を

取りたる爲め小賣相場は前年同様に据置くとの事なり

（銀座四神谷商店の調べに據る）

蚊帳の昨今

今年一月の初相場に較べては大凡そ二割强の下落にて、麻、木綿等の通り相場、先づは左の如し（但し此先の氣候次第にて織出しの歩丈け夫れ丈け騰貴もす可きは勿論の事、只だ今日の直段付を記すのみ、是は通り四丁目の蚊帳問屋近江屋西川氏に就て聞合せしもの）、即ち普通の需用多き六八に就て記せば

木綿地六八
- 清風印、垂四尺三寸、六十五錢
- 同　、同、（上物）七十六錢
- 極　印、垂五尺、（極上）一圓七十四錢

麻地
- 宮村印、九寸五分巾、垂四尺八寸、へり紅麻、角紐練絲、大鋲付、文字入り　三圓〇四錢
- 極手織印、巾同上、垂五尺、へり同上山、紐同上、鋲同上、一文字入り　三圓三十六錢
- 浪手織印、巾同上、垂五尺一寸、へり同上、紐同上、鋲同上、一文字入り　三圓五十六錢
- 誂手織印、巾同上、垂五尺一寸、へり同上、紐同上、鋲同上、一文字入り　三圓八十八錢
- 本手織印、巾同上、垂五尺三寸、へり同上、紐同上、鋲同上、一文字入り　四圓九十六錢
- 上冲風印、巾一尺、垂五尺三寸、へり同上、紐同上、鋲同上、一文字入り　四圓二十八錢
- 稀冲風印、巾同上、垂五尺五寸、へり同上、増紐付、平鋲唐草彫、一文字入り　六圓五十錢

角母衣
- 木綿八寸巾、二半三半、二十六錢
- 同　　上、三　四、三十四錢
- 麻揃室村、二　三、四十九錢
- 同稀冲風、二　三、六十五錢

音の虫

夕闇に散歩がてらのそゞろあるきちらりほらりと螢さへ見へそめたる都近き田の面、澤の邊、早きを競ふ都大路の縁日には、夫れ〳〵の虫のね聞へそめて、そゞろがてらのもうで人の足と耳とを引くやうに成りて、ちらりほらりと

鈴　虫（三　四　錢）松　虫（四　五　錢）蟋蟀（十四五錢）

大和鈴（十二三錢）草雲雀（十二三錢）轡虫（十二三錢）

邯　鄲（十四五錢）螽　斯（五　六　錢）河鹿（十六七錢）

ほたる一錢に就て二、三、四疋等

婦人社會の現象

◎貞婦平井いし女と德行表彰　貞婦平井いし女の事につきては前號に於て記す所ありしが、婦人矯風會は六月十日、麻布東洋英和女學校にいし女を招き、矢島かぢ子、潮田ちせ子、山路たね子出席し、津田仙氏、いし女の履歴を述べ、有志姉妹並に老人會の人々の義捐になれる贈物をなし稱德文を送り、最後に家永ゑい子がいし女のために作くられし讃美歌を唱へて散會せり。其歌は左の如し、

貞婦平井いし子の稱德歌（讃美歌二百五十七番あまつましみづの樂譜に合す）

一　塵にあくたにそみはてゝ、あまつひかりも見えぬ世に、
いもせのみちのしをりとは、この姫松ぞなりにける。

二　みやこのにしのかたほとり、世をわびつゝもふる川に、
生え榮えたるひともとの、たかきみさをゝたづぬれば、

三　花にたぐへし妹と背が、むかしは夢とさめはてゝ、
よもぎがやどにふきあるゝ、あらしの風になやむらん。

四　のきばかたむく柴のいほ、せこはやまひにおかされて、
むかしのかげもさりあへず、あはればかなき身となりぬ。

五　なれども妻はたゆみなく、なつのひるまも冬の夜も、
あるはくさぎりいさくりて、そのなりはひにいそしみぬ、

六　かくて十とせの春秋を、一日の如くいたづきて、
つくしゝ妻がまごゝろを、神もあはれとみそなはし、

七　人もあはれとめではやし、たゝへぬものもなかりけり、
かゝるみさをゝのちの世に、ながくつたへてかたらばや。

同月廿七日麻布區敎育會は同女が節操表彰式を麻布公立南山小學校運動場に於て開き發起者總代黒田綱彦氏發會の旨を述べ敎育會長東久世伯の頌德辭、高崎彰善會長の頌德辭、いし女の挨拶を黒田氏代りて述べ、西幸吉氏の薩摩琵琶貞婦曲（阪正臣氏作略之）を奏し、麻布、南山、飯倉の三小學校生徒約千五百名もまた此席に列して唱歌を唱へ會は靜肅嚴正深く感動の情を衆人にあたへたり。殊に宮中女官の人々はいしのために和歌を寄せられ此會にて朗讀せられしとなむ、記者は煩は憚らでこを記するの讀者に感の切なるとを信ず、

年を經て人の鏡となりにけりみがき〳〵し石の光は　高倉壽子

つまのためつくす誠は人のみか神もあはれと見そなはすらん　千種任子

かけきよき平井の水は濁りなき心をうつす鏡とぞなる　小倉文子

濁りなき平井の水は世の中の人の鏡となるべかりけり　岡　さち子

この石のかたき心はこがれにも玉にもまさる光なりけり　姉小路眞子

まごゝろの動く時なきためしにはこの石をこそひくべかりけれ　税所篤子

かたふきし伏屋の風なしのくらむ心を石のはしらにはして　小池みち子

以下薮發子、北島いと子、津守好子、生源寺いさを子、吉田鈺子、西西子、平田三枝子、吉用愛子諸女官なり、新聞に雜誌にいし女の貞操を傳へて天下の耳目は翕然として此篤行女子に注意するに至れり。歳寒うして松柏其節あらはる、人情輕薄にして道心微なる現今の社會にいし女の如き德行あるはまことに世道人心を維ぐために人意を强うするに足るべし。如何に風俗頽れたればとて世間は廣くしあれば德行貞操の婦人、あながち平井いし女一人に限れりとしもいふべからざれど、あまりに頽廢せる風俗人情の狀態は、やがて社會光明の側にある人々の心を結びあはせ善行篤志の人をもとむると切なる折柄、いし女に藉りて道義人情の精神を發揮せりともいふべき。美しき道義人情の花が、咲き所をば平井いし女の身にもとめて、好き果を結び、その果の實をひろく社會に蒔けりともいふべき。依りて思ふに、世は漸く進みて社會と個人と關係いよ〳〵接近き、女子もまた唯家庭の主婦たるのみならで併せて社會の一員たるとの知識を普く世の女子に知らしむる時來れるとを。女子がその家政育兒處世の内を守り治むるとの必要なると共に、またその同情親切義務をばひろく社會に施し外に行ふとの決して名聞にもあらず派手にもあらずなほ家庭に於て行ふべき料理拭掃除とひとしなみに爲さでかなぬ事と知るべし。いし女がその夫に對しその家に對しおのれに對して缺けたる所なき貞操節義の篤行をなせるは、やがて深くも大に社會のため功績を留めたりといふべし、この邊の事は知り易くして行ひ難きものなれば心がけ一つにてあるべ

し。いし女は不幸なる身の上なり、されば平和なる幸福なる家庭にあらむ人、はたこれを作らむとしつゝある人は、かゝる不幸なる人の身と心とをおもひやりおのれの内外に對する行爲をなしてこそやがておのれの平和幸福を眞の平和幸福として享くるとを得べけれ。

◎社會の明暗二境　日々の新聞紙三面記事といふものをとりて讀まば世の中の明るきところと暗きところはうちまじわりて眼の前に映るべし、一つ二つ記者の見たる上に於て思ふ所を述べんか、新聞紙が世間のあしき風俗の現象、即ち强竊盜人殺し、男女の汚れたる事ども、遊廓の情死話など、目だつやうに掲ぐるより、心あるものは眉をひそめ、かゝる記事多き新聞紙は、家庭に入るべからず、家庭に讀ましむべからずとやうに斥けて難ずるものも少からず、まことに一應は至理の次第ながら、事柄に邪なるまた卑く陋しき思想をこめて記せざる限は、あながち害ありと一概に難ずべからず、若きものに善き事多く聞かせで悪しきとのみ聞かすは元より感化の上に大切なる影響あれば、かゝる記事は斥くべきものながら、さりとて新聞紙をまるで見ぬといふとにもならざるべきがゆへに、これには見方の如何によりて害とも利とも分たむをよしとせむ。さるは世の人情風俗を省ておのれに比へ、よくよく世の中の味をかみしめて處世の法ともなすとまた要あればなり。

槇田のぶといふ婦人、林源次郎なるものに嫁し、姑と小姑(姉)と夫を唆かしたるために、家内に風波を起しついに表むき離縁となりけるが、のぶはあくまでも源二郎に分るゝを欲せず、のみならずあだにその夫に分るゝは貞にあらずと信ずるがゆへに、外見には離縁せりとはいへ、他に一戸をかりて住むととなり、源次郎これに通ひて從來の如く夫婦の契はなし居けるが、輕く薄き源次郎の心は何時しか貞にのぶと離るゝの情起

りたりけむ、かゝる例として腹にもなきともておのぶを賺し慰め欺くとも定めてありつらむおのぶが源二郎に對する愛情はついに衰へざるものから、或夜剃刀もてこれを刺したり、かくてのぶは拘留の身となりて謀殺故殺の刑に問はれ法廷に呼び出されし顛末は、近頃おのぶ源二郎とて人々の語り傳ふる裁判事件なり。事はもとより法律の上にかゝりてしかも控訴中なればそれにつき彼此いはむは本紙の預かる所ならねど、この事によりて時事新報の福澤先生は、現今女子の位置が男子の玩弄となり居るとを痛く論ぜられ、女子の教育を盛にするは勿論、心あるものは注意して女子を玩弄視する弊風を改むべしと說かれたり。今さらの言ならずとはいへ、時の勢、風俗頽れたるも一つは女子の地位が低きに基けるより生ぜるものなれば、この論の出づるもまことに時なり。さればにやかゝる事の穿に注意する萬朝報は今の世の女子が卑き位地、男のもてあそびとなり居る證例なりとて世に知れる人々の妾かゝへたる事を毎日の雜報に續載しはじめたり。可嘆しと顔背くる人はわれのみならじ、かゝる記事が世に幾何の價値利益あるべきかは論ふを措きて、兎にも角にも社會が女子の社會上の位地如何女子の境遇は如何といふとに注意し來れる徵證として見ることを得べし、前條記せる平井いし女の德行の如きは所謂明らかなる側を表はし、萬朝報の記事の如きは暗き側を表はしたりといふべし。かく記事を見る上にて心あらむものは、何事かおのれに志すとありてそが資とならむやうに世に表はるゝ事どもを視たらむには、惡しき事なりとてあながちに害とはならず、記者は世に女子が新聞にあらはるゝ明暗二境の記事をばよく〳〵照しあはせて女子社會進歩の研究とせむとを望む、唯々娯樂をもしろみとのみ視ずして省察の資とせむとをのぞむなり。

◉北白川宮女王の御詠　故北白川宮殿下の御息女なる滿子女王殿下は、今年十二歳にておはするが聰明いはむかたなくいとねびれたる事ども擧動ひたまふともありけり。去る頃より相州葉山の高崎男爵の別莊に宿らせられ、男爵朝夕侍りて和歌など詠みいでゝかしづきけるに此上なく興がられしが、男爵程なく歸京せしより、本意なく思し、御文を男爵に寄せられける末に、

　高崎が歸つてしまひそのあとは
　　たゞ何となくさびしかりけり、

才藻の程こそ將來秀れさせ給はむと人々申しあへりけるとなむ

◉津田梅子　米國にて近く開會する萬國婦人教育會には本邦より津田梅子派遣せらるべし

◉母の會　いつぞや本紙にも記せる如く基督教徒の老婦人等の設けられし老人會は時々催さるとなるが今また母の會なるものあるを聞く、第二回六月八日赤阪靈南阪教會に開き有益なる話あり烈女傳などその一なりきといふかゝる會は一般に行はれむことを望まし

◉夏季女子講習會　東京府教育會にては來る七月二十五日より八月十四日迄三週間神田橋外東京府高等女學校内に於て女教育及一般女子の爲めに國語（講師渡邊政吉氏）家政學附保育法（講師後閑菊野氏）裁縫教授法（講師谷田部しゆん氏）の講習會を開くと云ふ是れ女子講習會の嚆矢なり

◉朝鮮婦人の蠶業講習　府下王子西ヶ原蠶業講習所に滯留し居る朝鮮婦人は昨年より引きつゞき蠶業に從事し、熱心に教授を受け居るが、京城の生れにて林氏の妻名を春嘉といふ良人は工業學校に入りて修學中、春嘉は最早日本語を解するとも頗る上達せり歸國の上は國風をおかして養蠶の業を彼地婦人に獎勵すべしといふ。

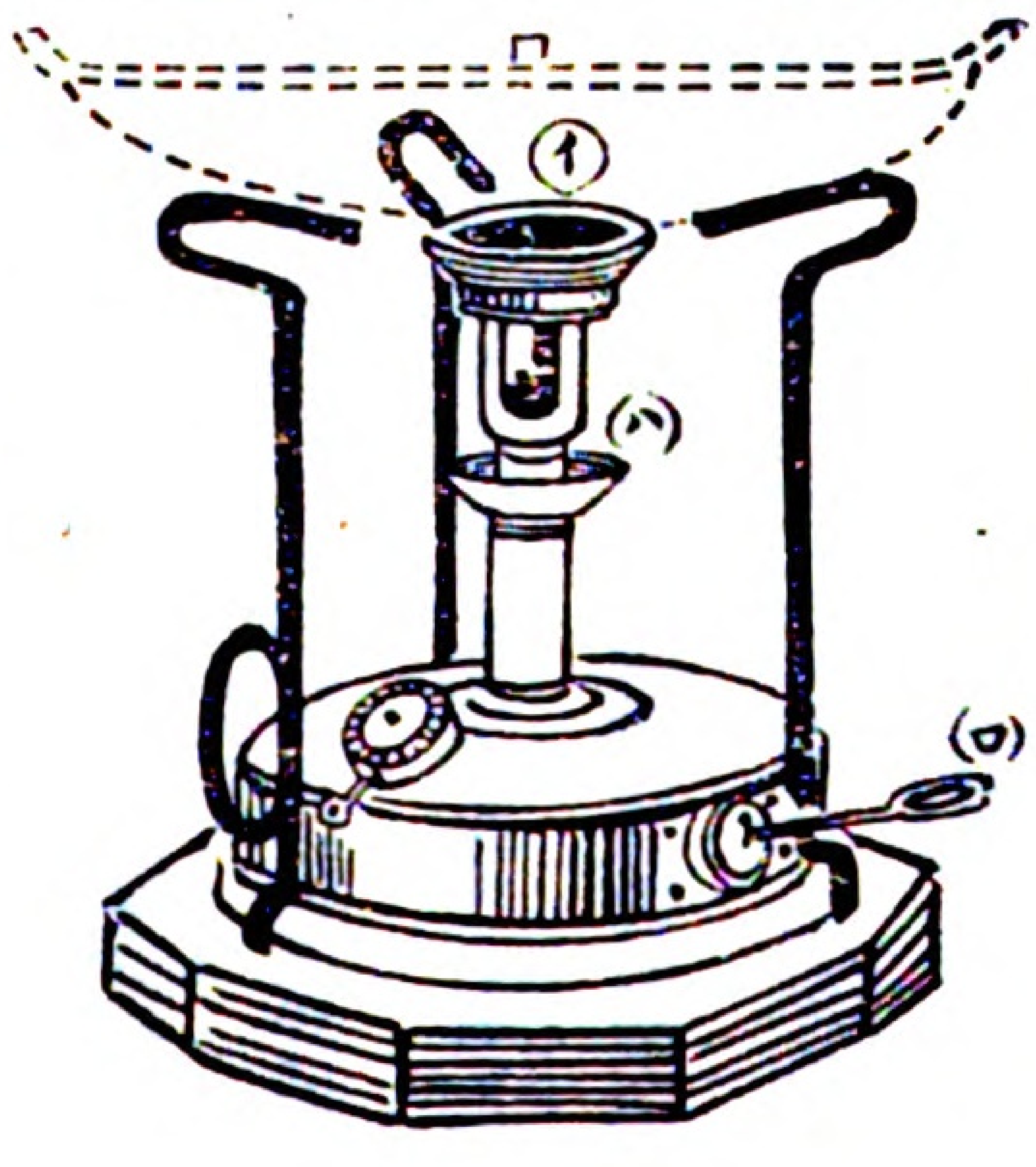
◉清國の婦女不纏足會　清國の女子がその足をわざと

小さくすくまする習慣なるとは頭髮の辮髮なるとと共に一種特別なるところなるが、頭髮は兎も角足をすくませて天然の躰格を害ふともとより野蠻にして道に缺げたる慣習なるはいふまでもなし。近頃は彼地にても此習を改良せんとするもの多く、婦女不纏足會といふもの起り、女子從來纏足の陋弊を破り人躰上の完全自由を計らんとて頑陋なる湖南湖北の人々さへ之を唱へすでに十萬の會員ありといふ。

◉女子新聞　佛國巴里にては女子の手を以てラ、フロンドと稱ふる日刊新聞を發行し一人として男子を使用せず主筆記者を始めとして各部擔任の記者通信員事務員職工及小僧に至る迄盡く女子を雇使し其建築も壯麗を極め居ると云ふ

◉瓦斯厨爐　圖の如き瓦斯厨爐は使用に便利にて危險無く臭氣なく毎戶必要の器なり、發明者は江夏善造といへる人、京橋南金六町七番地宇都宮商店にて賣る、

圖中（イ）は石油を瓦斯に變化せしむる處（ロ）は喞筒の手、（ハ）は皿にて初めてアルコールを注入する處なり。



◉口繪の解　夕涼み

よくぞ男に生れけるといへば浴衣一枚吹く風に胸毛をゆるがせたる髭男の風情を思ひ、雨後の月誰ぞや夜ふりの脛白きといへば、暑さを輕き團扇に避けて淸き水の邊にそゞろあるきする優しき女子の風情を思ふ、男にても女にても、淸き流れに舟浮けて、風と波とにうちまかせたる夕涼の興深きは、古人のいひけむ五百兩は愚か、千萬金にもかへ難き味なるべし、況してや一家族の團欒を一の舟に移して、暑さと積日の生活の勞とを慰めたらむには如何ばかり樂しからむ。（此圖

は舟と水との風情を嵐山の景に借りて涼の意を示せり）

網うちの見えずなりゆく涼みかな　蕪村

寄書

児女に三味線を習はす弊

牛込　内川久雄

清元常盤津義太夫演劇落語小説等は種類によりて男女の徳性感化に益する所なきにあらねど現今世に持囃さるゝものは最も聞悪き歌詞を以て作れるものゝみにて男女の風習を害すること甚だ多し然るに世の父兄は其女子をして學校教育よりも三味線の稽古専務とせしめ或は之れを見聞せしめて怪しまず又甚だしきに至りては父母兄姉たるもの自ら三味線を把て子弟に淫靡卑俗なる歌曲を敎へ之等を以て家庭教育と考ふるものあるを見るに至る實に淺間しき限りとぞ覺ゆるなり。

目下我が國に於て中等以下にて女子ある家にては五分の四以上は此の淫靡卑猥なる三味線などの稽古をなさしめざるなし而して偶是れ等を學ばしめざる家に行き「貴家にては家庭教育に注意せられて三味線などを學ばしめ給はざるは誠に感ずべきことなり」と云へば其父母は曰はく「娘も少しは絲の口もあけませねばなりませねど今少し年を重ねましたらは是非師匠を取りませねはなりませぬ云々」と斯の如く學ばしめざるものも條件のあるもの亦多し

嗚呼社會多數の人々是等の結果を顧慮するなく從て隣人を類化せしめなば天下幾百萬の無邪氣なる子女子男をして此悪潮流に感染せしめ以て堕落の基となると明なり依而父兄たるもの深く警むべき事ならずや。

家庭教育の注意すべき件は一二にして止まらずと雖も中に就きて目下の急務と考ふるものの一は是なるべ

し。

記者曰く時弊を言ひ得て當れり

美談一則

播摩　梅友子

家庭の和氣藹然たると否とは一家の盛衰に關はること切に大なり播摩赤穂郡赤穂町に新田清松と云ふものあり家は貧しといふにはあらねど米の小賣なして其日を送りけり家族は夫婦と姑との三人にして妻と姑とは意氣相合はず常に喧嘩の絶ゆる間なかりしが折しも二十七年の十二月清松は陸軍歩兵にとられ後にのこされし七十あまりの姑と妻とは如何にして生活を求めんか途方にくれ居りしが其妻はもと敎育あるものにはあらねども至て氣丈のものなれば夫を送りし其日より心とり直し朝はまだきに起き米を搗き八九時頃より草鞋をはき車を引きて町家を賣りあるき歸りて三時頃まで又搗き日暮になれば石油を賣りまはりぬ、時に戰爭の熱高き頃なれば誰しも其篤行に感じ哀れに思ひて此女の賣聲聞くときは誰れも彼れも買求め彼女の來るを待つやうになりぬ。身分ありて米など買はぬものも時により十錢二十錢惠まるゝこともありき斯くすると三年膚を裂くの嚴寒も金を熔す酷暑も厭はず紛骨碎身家業に勤めければ姑も終には其志に感じてよめの歸るまでに飯たき湯沸かし慰め二人の間に反して中よく波風立たず、去年の冬夫の退營するまでには小金は出來て今にては三人の家族いと睦まじく大なる家に轉り住ひ煙草屋をも始め家は益々榮え行くとぞ。

除蟲菊の話

遠江　日阪救濟堂主

除蟲菊は（のみとり粉）と稱して盛に販賣せらるゝものにして原名を（インセクトポーダッラト）と稱し、强

盛なる繁茂力を有する宿根植物にして、鋸歯狀を有する葉ありて白又は黄の花を開けり、霜雪の害なく歳を追て其株増加し、一度植付けて肥料を與ふれば年々其盛にして繁殖す(培養法)苗は所々に販賣するも紀伊國有田郡小田原二百十九番地帝國除蟲園御前喜八郎に於て販賣するものは良苗にして一坪廿五本位の割合に植付て良し植付季は春秋の二季を良とす植付より二年目には開花す

(花摘採法)花は四五月の頃花開き開花後二三日の内に摘採る之を丸乾又は切乾とし晴天三四日間日光に乾し石臼又は粉挽器械にて挽き寒冷紗又は絹篩代用の糸金篩にて篩ひ取り瓶中に入れ置くべし挽き殘の粕は蚊やり粉とするを得るなり、拙家に於ては年々二坪の畑地に培發せしが五六人の家内中時々使用して餘りあり本誌愛讀の姉妹よ家事の餘暇を以て乾燥の地へ培養し以て家内の安眠を取り精神を休養せられよ。

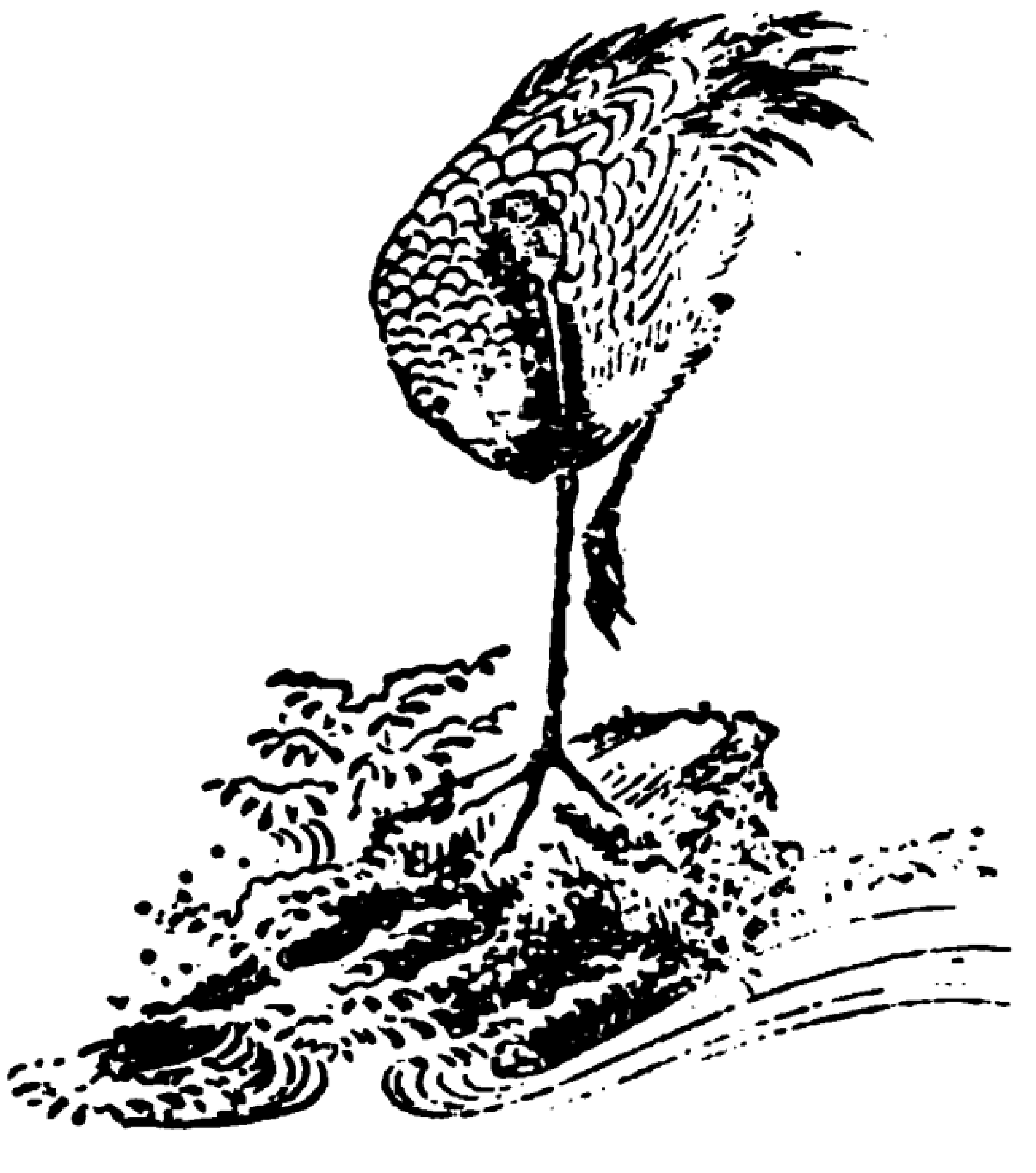
社告

次號の夏期附錄

例に依り次號には諸家の小說小品を收めて附錄とし消夏の好伴侶たらしむべし其如何に異彩あり興趣あり詩味あるかは國民新聞の廣告に見るべし

正誤

本紙頁數一より十六に至る、(第十一卷四七三より第十一卷四八八に至る)は(第十二卷一より第十二卷十六に至る)の順次誤植につき訂正す



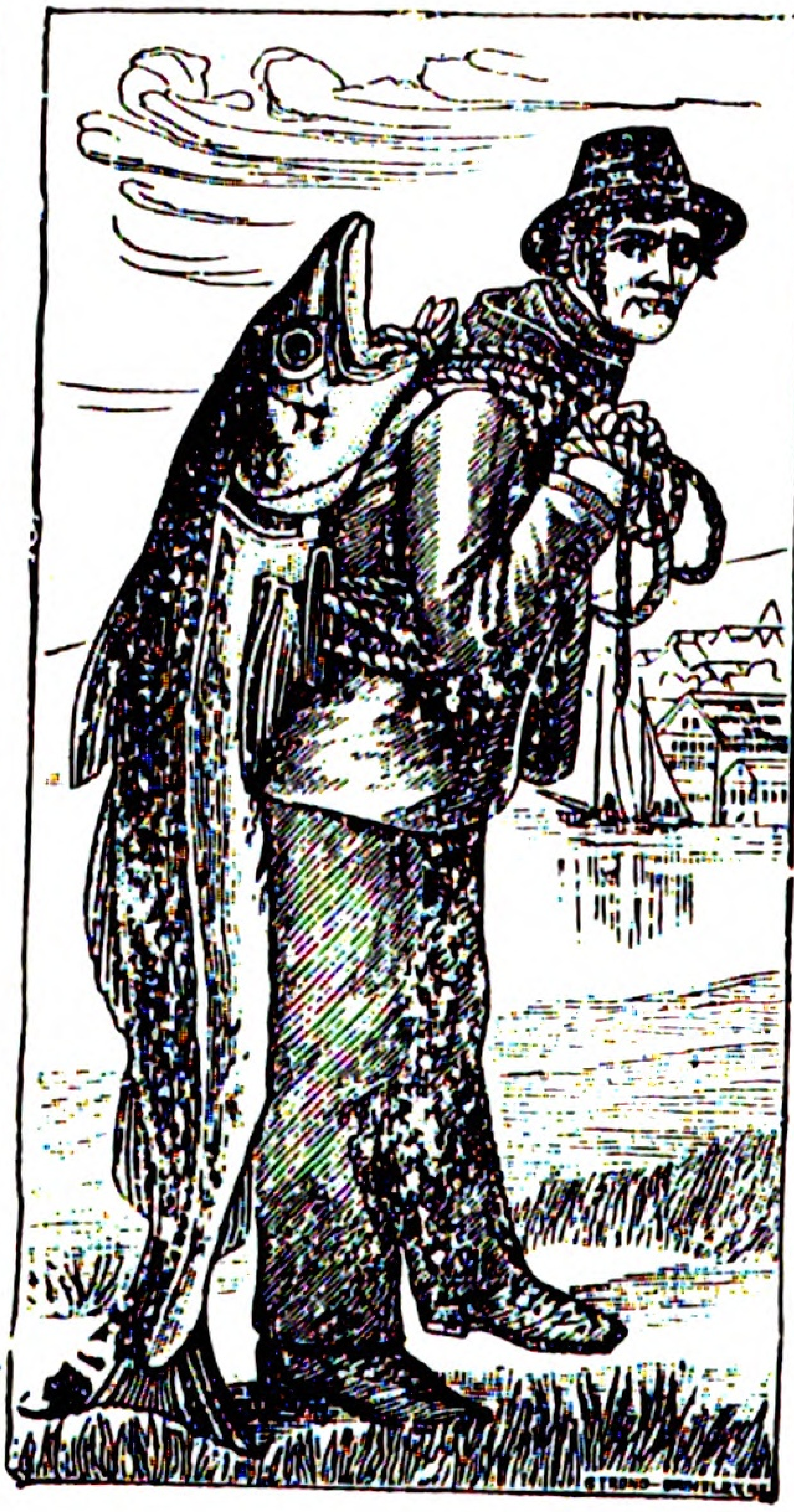
○小兒○はよく肥へて笑ひ顔の愛らしき筈のものなり痩せたる小兒は興味勘きものなり之れには彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸とを配合して飲み易く且つ味ひよく製造したる**スコット乳菓**が最も適當なる食料にして忽ち肉を肥し發育を助くるなり●此の乳菓が滋養分に富むとは他に比類なきが故に虚弱なる人々は之れを用ゐて奇効を見べし

特に**虚弱なる婦人**は一度之れを服用せば忽ち健全なる身躰となること疑なし

○咳嗽及風邪○は病の初めなり、次に[illegible]るものは肺の衰弱にして身躰を痩せしむ、最後に彼の恐るべき肺病の萌芽を顯すなり彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸の調合物なる**スコット乳菓**は能く咳嗽及風邪を去り肺臟を強くして活力を與ふるること實に驚くべし●●●此の乳菓の洪大なる滋養分が**嬰兒、小兒**及虚弱なる母親を益することと實に大にして、其味も至て滋味なれば喜で服用するなり

此の乳菓が精氣を増し滋養分多く最も効驗あるものなるは世界の大醫の擧て證明するところなり

○スコット乳菓の説明書御入用なれば横濱八十九番日本支那貿易商會へ此の雜誌にて御承知の旨御申越あれば無代價にて呈す



左の大取次所の外各藥舗にて賣捌き居れば御購求ありたし

横濱境町	友田嘉兵衛
仝　境町	鳥居徳兵衛
仝　太田町	大川佐兵衛
東京本町四丁目	鳥田久兵衛
仝　室町	資生堂
仝　本町三丁目	鳥田忠兵衛
大阪道修町二丁目	小西儀助
仝　道修町二丁目	武田長兵衛
仝　道修町三丁目	田邊五兵衛
仝　道修町二丁目	田畑利兵衛
仝　道修町二丁目	福田清右衛門
仝　道修町二丁目	鹽野儀三郎

作文軌範　明治少年傑作集

本書は明治の敎育を受けたる秀才文士の筆になれる明治文章の軌範たるべき佳篇名作中の其粹を網羅集成し以て一は少年諸氏が文章練磨の好侶伴たらしめ一は以て明治昭代の餘影を千歲に傳へんとす希くは天下の秀才諸君奮て金玉の投書に勵み以て明治文豪の芳名を遺し賜へ

原稿募集

〆切　八月十五日

投書規則

一投書は普通文和漢文書簡文漢詩和歌新體詩俳句とし各種五篇以下とす（故に一人にて凡て四十篇迄投書し得らる）

一投書者は明治の敎育を受けたるものに限り其年齡を問はず

一投書は他の懸賞募集に當撰したるもの又は雜誌に揭載したるものにても差支なし要するに文章の粹を拔くにあり

一前項の場合には何書又は何雜誌何號へ揭載したることを欄外へ明記すべし（批評あるものは之を明記すべし）

一投書用紙は半紙又は美濃紙にて一行二十四字詰十二行たるべし

一投書は每一編に用紙を換へ且つ每編の初に生所現在住所族籍氏名生年月日並に投書文を作りたる年月日當時の年齡の七行を詳記すべし

一投書は其封筒に少年傑作集原稿の七字を朱書すべし

附記

投書は現今の各專門名家の撰拔を乞ひ優等者十數名の寫眞版を口繪とすべし

豫約印刷

本書購讀希望の方は往復はがき又は切手を封入して送らるべし印刷濟の上は本書の部數を限り印刷す故に投書家と否とに係らず併せて價格の報導を爲すべし

發行所　東京市芝區日影町二丁目一番地　通り櫻井一十一番地　内海書店

（明治廿五年十月十四日遞信省認可）（明治卅一年七月十五日發兌）